

蘭說
辨惑

磐水夜話

二一

511

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23

津1
5/11
門
瑞
卷

天保三秋

和田紀定輝藏之

蘭說辨惑序

蘭說者何。嗚蘭之說也。嗚蘭人之所說與人之說。嗚蘭也。今衆人之說。嗚蘭也。妄常以嗚蘭詬病。曰其人無踵。曰其域無壽。諸若此類。率皆庸俗所口無稽之言。雖未足以深責薦紳碩學。亦往往之其所弗知而辟焉。狃而不察。雜然槩以爲穿鼻跂踵之儔。亦坐不能自讀其書。而徒吠聲傳虛。故

蘭說辨惑序



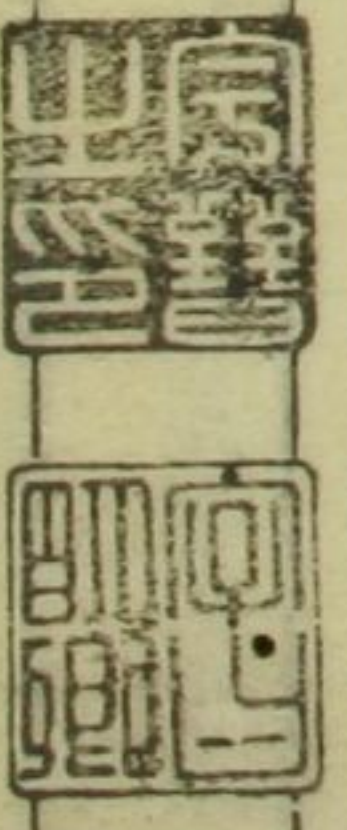
耳雖則云爾於學業何與則磐水子豈屑
爲之詹詹之瑣瑣者哉言以止言乃言已
蓋其操心以爲人之有技若已有之才能
術智何必出諸已然後愉快且人各有量
事不可兼壞之碩鼠何苦不多其又以身
爲五技也苟獲其人而教育之俾人人學
焉而成其才所近以供
國家仁民之用則庶幾萬一有以報答

昇平之鉅澤乎是以非其執事以朝夕
於君及夫五味五藥以待有疴瘍者造焉
而攻乎斯癘乎斯以嘗其技也未嘗不研
精覃思密勿從事於其學矣於是從學焉
者質問焉者四方鳩集遐邇靡至殆不然
乎叩竭者日甚一日猶且小鳴大鳴縣鐘
之應擊待其從容然後盡其說面命提耳
諄諄乎不能自休豈所謂明鏡不疲於屢

照者非邪。雖其性之純至，使然哉。距非學之博而積之富贍，何以能至於此哉。唯其志之剽乎教育，而汲汲於進學成業，至不急之問無用之辯。若無踵無壽之類，則以爲無益，不欲數答之。二三子亦居恒苦渴，其不間請益也。不欲數失時，乃爲筆錄，是編以禦彼輩。其卑言儕俗，不甚高論。職是之繇，嗚呼。磐水子豈屑爲之。詹詹之瑣瑣。

者哉。言以止言，乃言已。夫然後乃今先生有以省無用之辯。弟子有以得請益之間。而世之讀是書者，有以兔襲吠聲，傳虛之跡矣。一舉而三善皆得者，而且所不屑爲也。則他日所欲有爲者，其將不測夫。天明戊申之冬。

槐園 宇田川玄隨 晉



一 先生傳つね 和采醫書わんざい 翻譯かんやく 此業このわざ を終おひ めて身み の
書を譯定やくてい 一 同業どうわざ 乃すなは ち一 傳つた へお与あた へし其その 面目めいもく を
内うち へしとんとて其その 傍そば らお作つく らる所ところ 此この 蘭學らんがく 楷材かいかい
六物新志ろくぶつしんし 芳錄ほうろく 榮えい 曉きょう 摘てき 芳ほう 乃すなは ち此この 編系へんけい の法はふ 書しよ を
ふかき編解へんかい なりといふ

一 之この 後のち 一 加くわ へるに連つ なる日ひ を立た ちて同好どうこう 此この 法はふ 志し を守まも じ
お守まも ちを講習かうしゆ 一 及およ び采さい を誘う へるをを 終おひ めて先生せんせい
乃すなは ち創つく り出だ したる此この 業わざ をほごおせし一 其その 乃すなは ち蘭學らんがく 志し と

欲ほ する此この 志し かり其その 身み 業わざ 連つ なる一 也なり 一 十數
年ねん 不ふ じつに譯やく しく一 一 教きやう 習しゆ せしむることか
知し らず一 一 在あ り先生せんせい 此この 群ぐん 芳ほう 錄ろく 基き 小せう 一 一 子こ 聖せい 書しよ を改か
して類るい 同どう 志し のあり及およ びを扇せん 小せう 一 一 熟じやく 一 一 也なり
ゆゑに學がく ぶとのあり且かつ 官務くわんむ と治業ちぎやう をりて日ひ 教きやう 示し
あり一 一 奔ほん 走そう 一 一 家か 一 一 あり所ところ 在あ り病室びやうしつ 此この 診察しんさつ あり
疝ぜん 疝ぜん の種しゆ 養やう あり子こ 傳でん 為ゐ 諸しよ こと一 一 一 お難がた 一 一 也なり
んど應酬おうじゆ 一 一 一 あり其その 花はな 一 一 一 其その 身み 業わざ 一 一 一 身み 業わざ 一 一 一

同籍乃法生屋、もしもさうだ毎、一々用不差のこ
とをか、どうも同て先生に勸業をさゆ、こがらうもの
くかう、先生寸法を井、む此際生か、い、こ、後
さいとふとい、い、と博覽、い、い、て、あ、人、い、ま、毎
件、決、つ、こ、後、を、さ、あ、此、小、子、分、を、知、り、い、侍
して、師、の、大、業、を、修、る、乃、坊、を、い、い、ふ、一、取、の、取、ん
辰、い、あ、を、う、い、ひ、は、編、の、教、條、を、筆、授、け、い、小
終、り、此、一、部、を、来、り、頃、を、校、正、い、い、は、二

冊とか、い、お、せ、う、い、い、蘭、説、辨、惑、と、題、い、法、回、の
多、も、あ、と、か、す、い、後、者、倫、師、い、い、は、い、り、乃、寸、表
なり

一 全編の法件、い、か、多、く、い、田、名、法、よ、い、て、詳、説、を、
さ、う、い、の、名、列、い、い、生、名、物、の、譯、文、卷、を、か、き、と、此
あ、ま、だ、な、り、志、わ、り、を、其、書、を、請、ひ、得、く、い、あり
此、編、は、固、よ、る、博、洽、乃、す、い、示、其、所、乃、の、い、り、わ、り
む、志、を、後、と、い、その、知、さ、る、所、い、い、さ、る、て、其、卷、を、い、

付
同、一、事、文、

三

碩子セキゴを築ツキ於オ人ヒトをイいいといふとかか〜〜ととききよよ〜〜も
わわ〜〜ととんんとと云云尔尔

天保中仲冬朔旦

丹波

石馬元晁誌

目錄

- 和蘭國名
- 短命
- 跟ヒなな
- 堀ヒりり酒酒
- 硝子并圖
- 七ヒああ并并図図
- ろんろ〜〜
- ささ〜〜
- 抄ヒりりのの
- だだんん
- 駝ヒ多多 食ヒ火火鷄鷄并并圖図
- ぶぶ〜〜

○ 写生鏡所圖 ○ 升降水并圖

○ らんせいの・だんごふさ

○ 入津の始并長寄旅館 ○ 江戸系向此由本及交易

○ 糸向此之名 ○ 外科

○ 押んがぶがぶる大畧再世界畧因

上下總計四十六條

同海く終



阿蘭陀辨惑卷之上

船石水先生口授

門人 福知山醫酒官有馬元晁文仲筆記



○ 阿蘭陀國此名

問て曰「らんた」といふ文字世間通用し紅毛又を
阿蘭陀と書くらば誤正字ありや又別し文字

阿蘭陀

わらまーや きていくく ばらんぶを

此のろごく漢字と用ゝ國一わごも字體

系を榮子階梯一洋一に此ありおやく

正字わごも娘を一元来「あらんぶ」といふを

「あらんぶ」といふは訛り阿蘭陀といふ字を

清人の音譯字なり唐音讀一と稱ぐ阿蘭陀

をきごよく正音ふかつり明人を和蘭唱蘭荷

蘭。甲と法蘭得亜をいふ字と名譯一と

今此清高は何蘭と稱とごり一と紅毛紅夷が

と稱るるを誤りなり支那も此名を稱るる此西人

と稱るるを誤りなり支那も此名を稱るる此西人

生米詭異とといふ書一辨一と書るるなり

○短命

甲くいさく一の榮比人行とて短命なりと世に人乃

呼ぶるなりなり実なり所なりなりや

吾等曰此説はよりうて起さるるを所由を考るる人生活

夫をてよるを賦する所にして漫世界は是れ國いげも
此地といふともしうわさるべきやうなりと後たう
もやゆくと同じ事と夢ゆれどその中一海
濤教アリ航と帝とる人一を能命あるもの多く
大抵中へおぼしめて終るといふと後を徳海あり大
洋乃海と犯し幾行百回といふ限りかくなりと
きいよひゆるそのあいくさびり辛楚艱勞わやうとさ
るべきやうなりわ事な故へはくしとさうしん世風

船底のみくばとありと此海一と魚腹は葬らる
か心を冷し鬼と消れ事教のげうとさ事
なりと一百里二百里は舟波をさうと事く
船と一げめ貨物を投ド命をうしとの事い
たつきゆる事ありといふんや東の教アリ
の風波とまぬきく性さ日本より事なまきとさ
わらぶさうしんを後山とや舟宗となく
る人を知れとて必ありて宗を老ひ又さ

同裸體圖



同子女圖



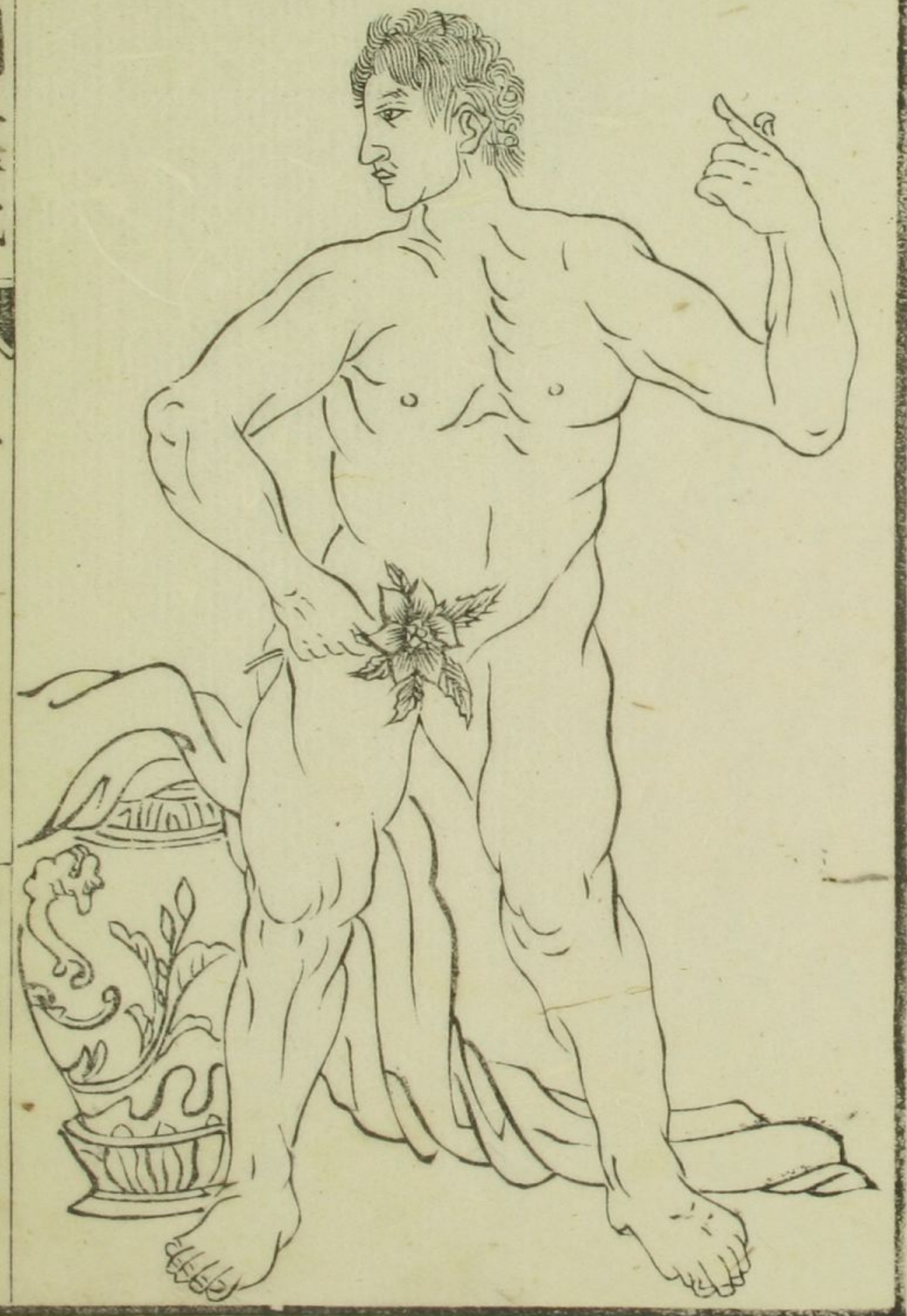
廣言新意

上

四

六

同體裸圖



同體裸圖

同體裸圖

女體圖



女體圖

女體圖

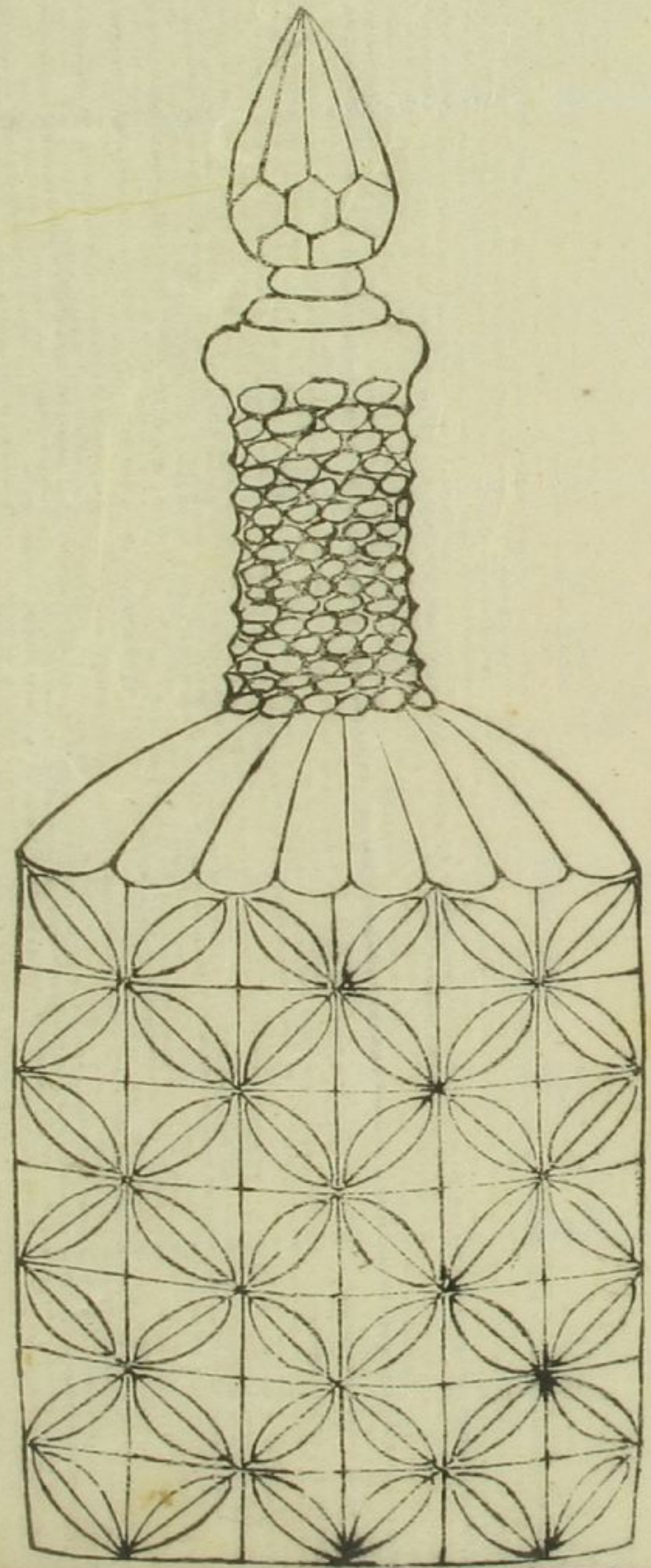
いひをうらやみはれも長短は〜〜〜どきうらひ
 くさ一娘な〜ど長崎〜〜大勢は和蘭人〜〜
 いあ〜ありを〜海江戸糸向〜〜きうら「らんま〜」といへ
 る「びん」など長〜〜てかく〜〜さ志し彼人
 菊神ろ長張〜〜く〜〜そのな〜中長人
 かく〜長〜〜見〜〜なり〜人尿
 小〜〜片足〜〜わ〜〜犬〜〜い房中〜
 体多〜〜く〜〜媚業〜〜と〜〜お教一向〜〜わ〜

き取となさ〜〜法か〜

○葡萄酒

同く〜酒ぶ〜酒阿刺吉珍配お〜
 わり〜製法〜〜の〜
 蘭酒を〜法〜〜買〜〜地〜
 て〜か〜〜醸〜〜の〜製法
 ー〜〜〜い〜〜名〜酒〜
 といふ〜葡萄を〜いん〜

「いぶげまはて」



南蛮辞書
二

一
カ

「ほろわろ」

「名が」つてぶらんしきざらける



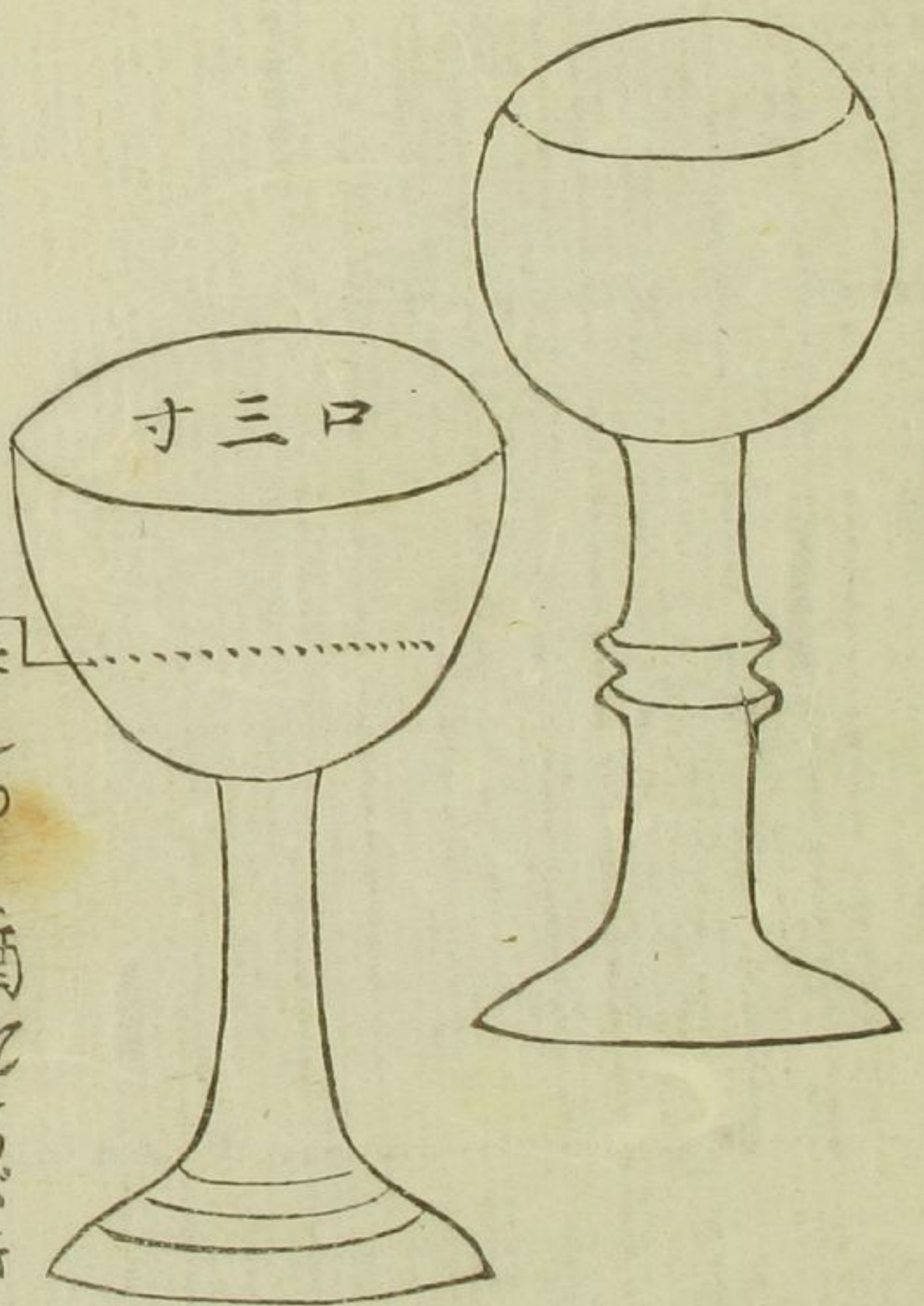
二合五タヤど入

南蛮辞書
七

一
カ

アムンセ、ウツイン、ウツイン

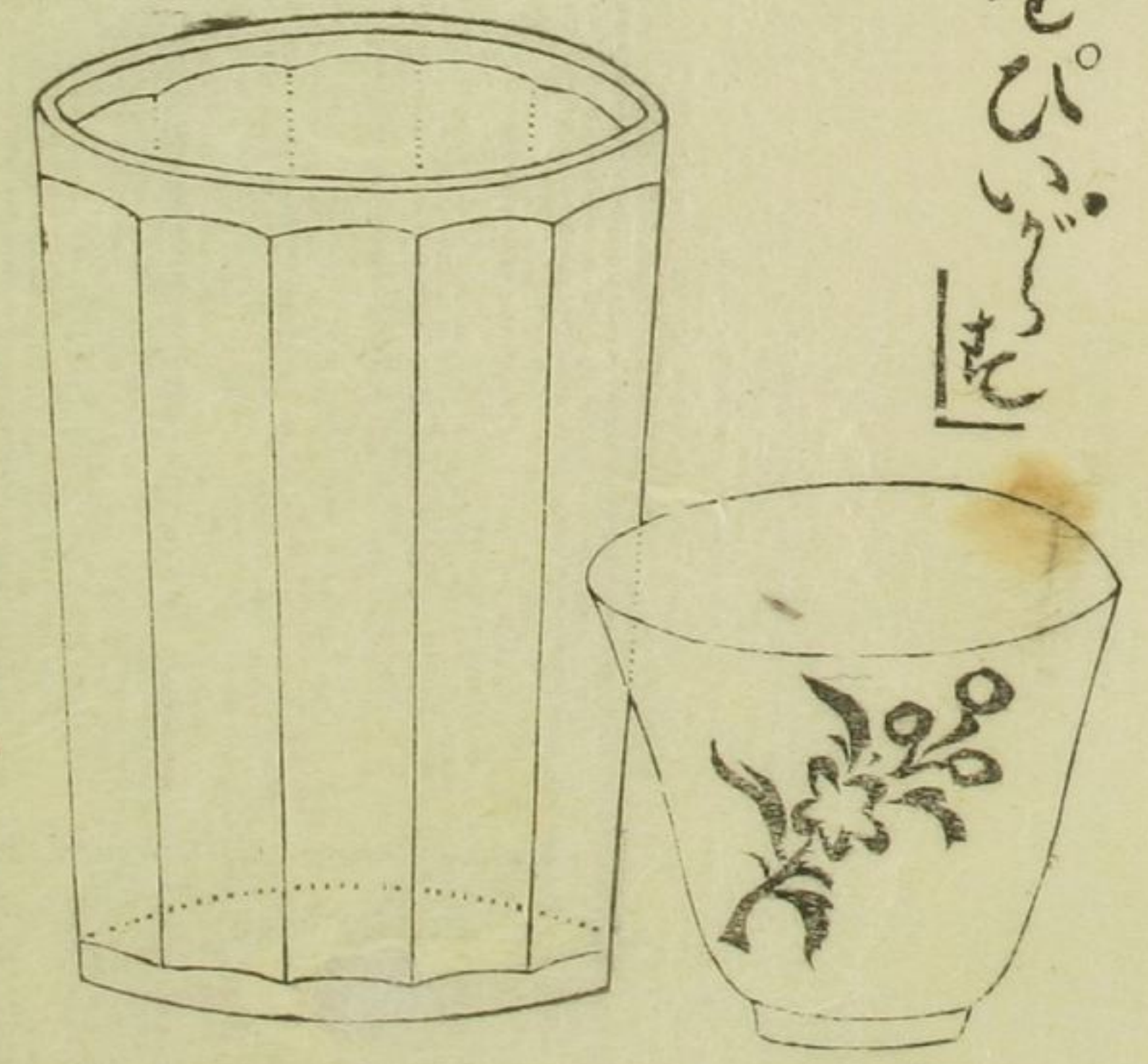
酒 水 硝子



此辺の中酒をきき上り水を加し暑中杯用ゆ

アムンセ、ウツイン

形猪口めし
俗くきりこみ金
ふらふらとまよひ
ふかびいふがしと



アムンセ、ウツイン

ふまわりふま酒をけむうらふ

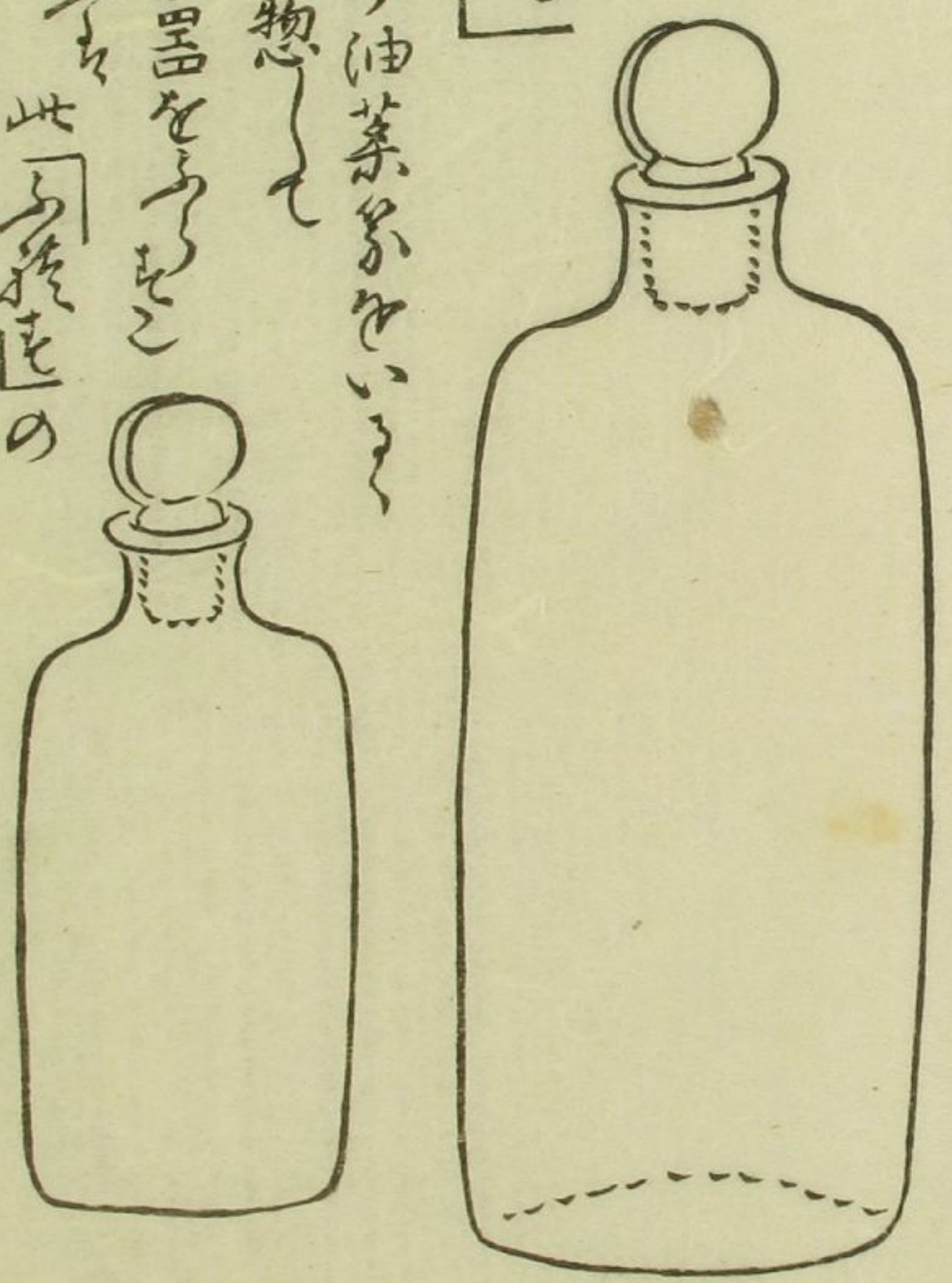
けふきい

形状大小種々あり
俗間とらを
こつとふ

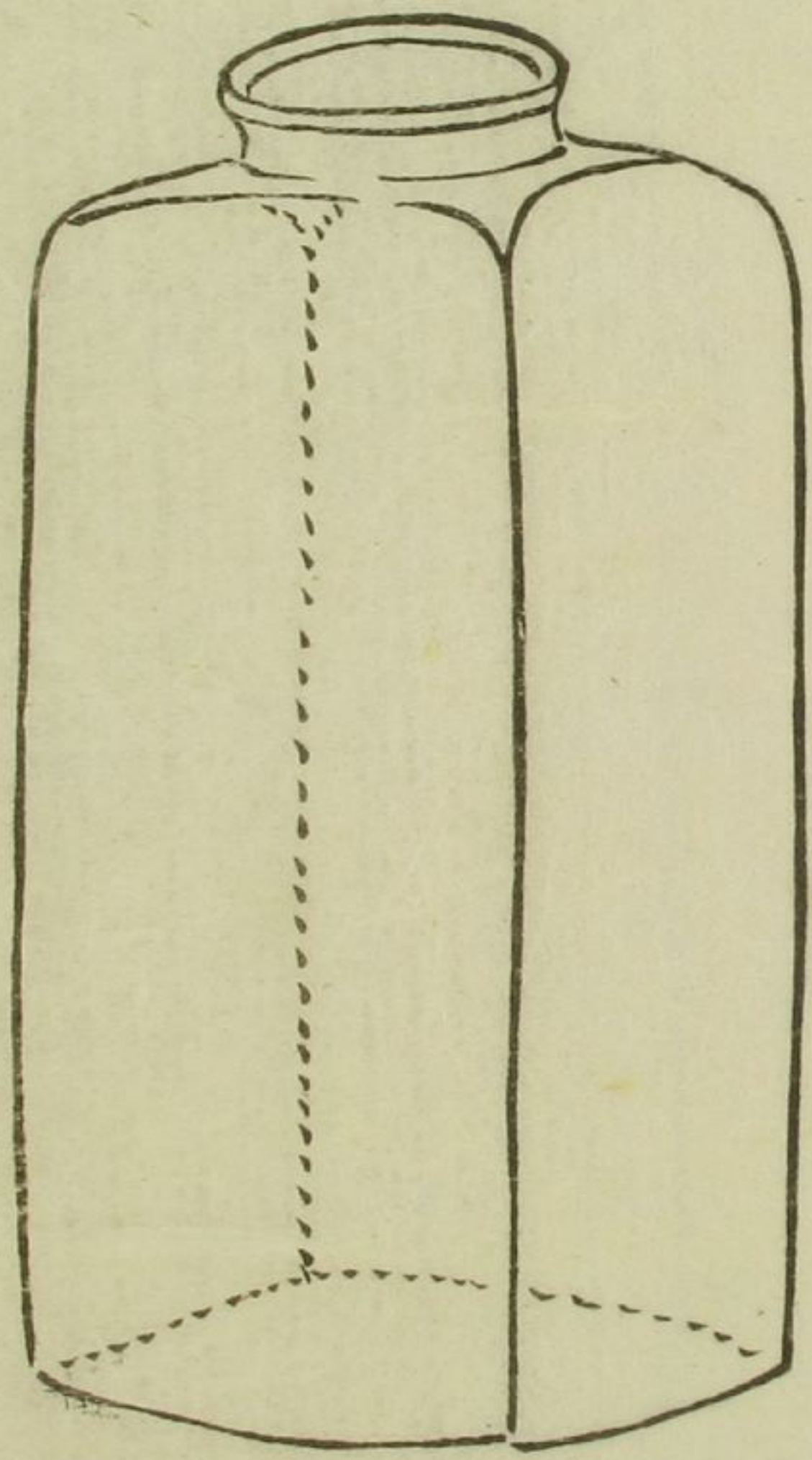


ゆきし

大小あり油茶糸をい
ものし惣して
硝子器をう
と
此ゆきしの
わやゆりな

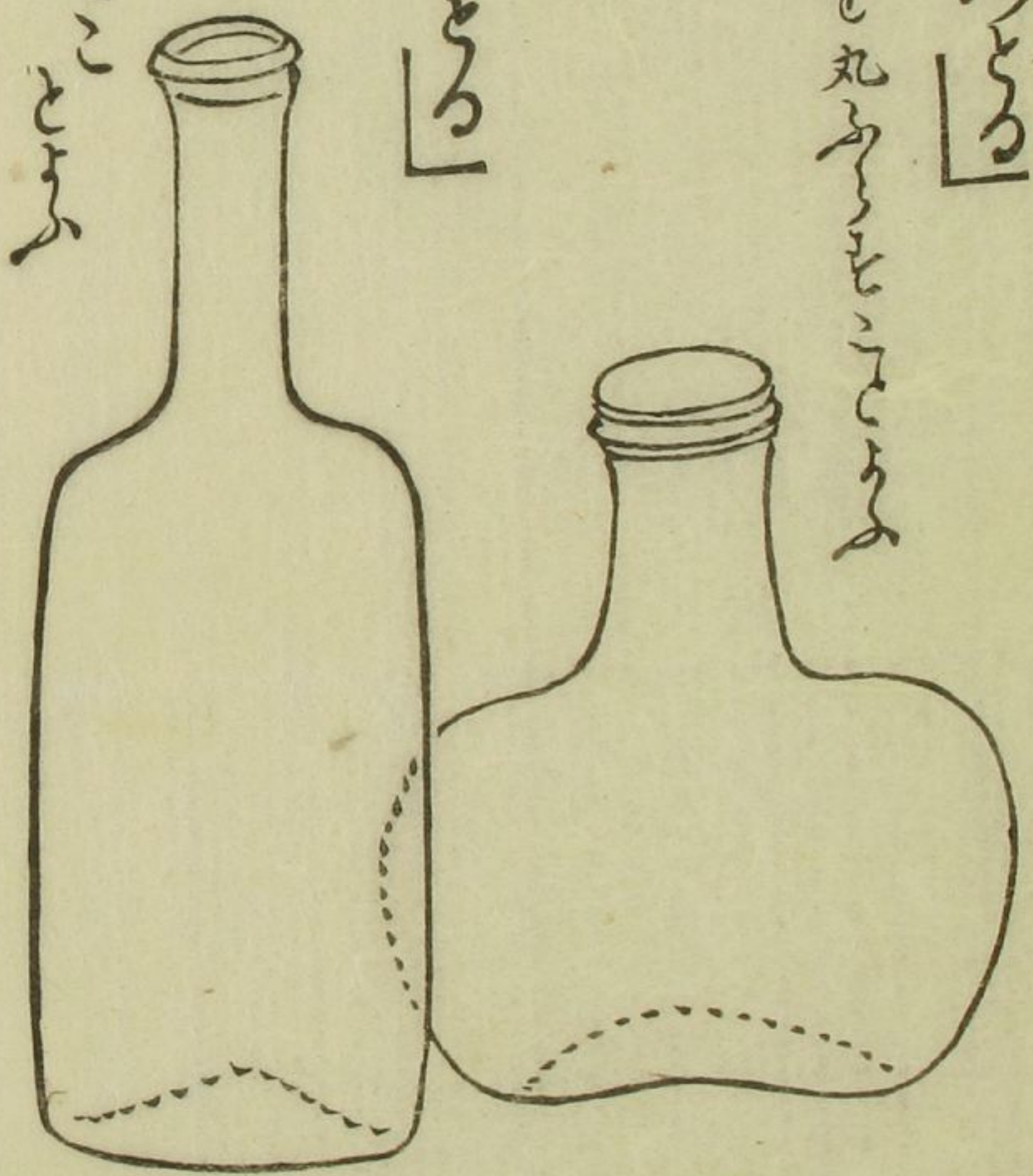


本草綱目 卷之四 瓶



「瓶」
潤
口

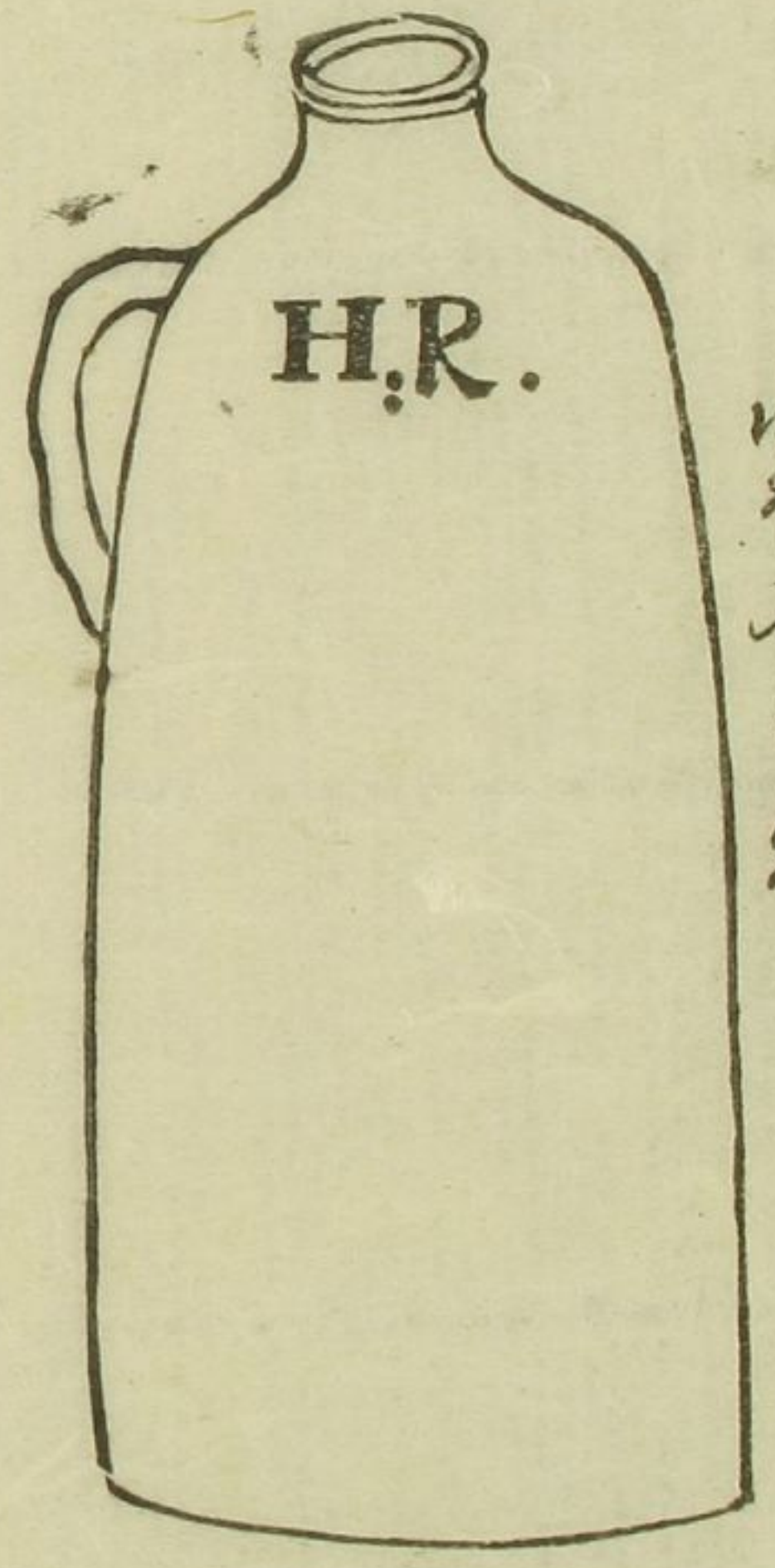
「瓶」
圓
俗
五合



「瓶」
長
俗
五合

五合

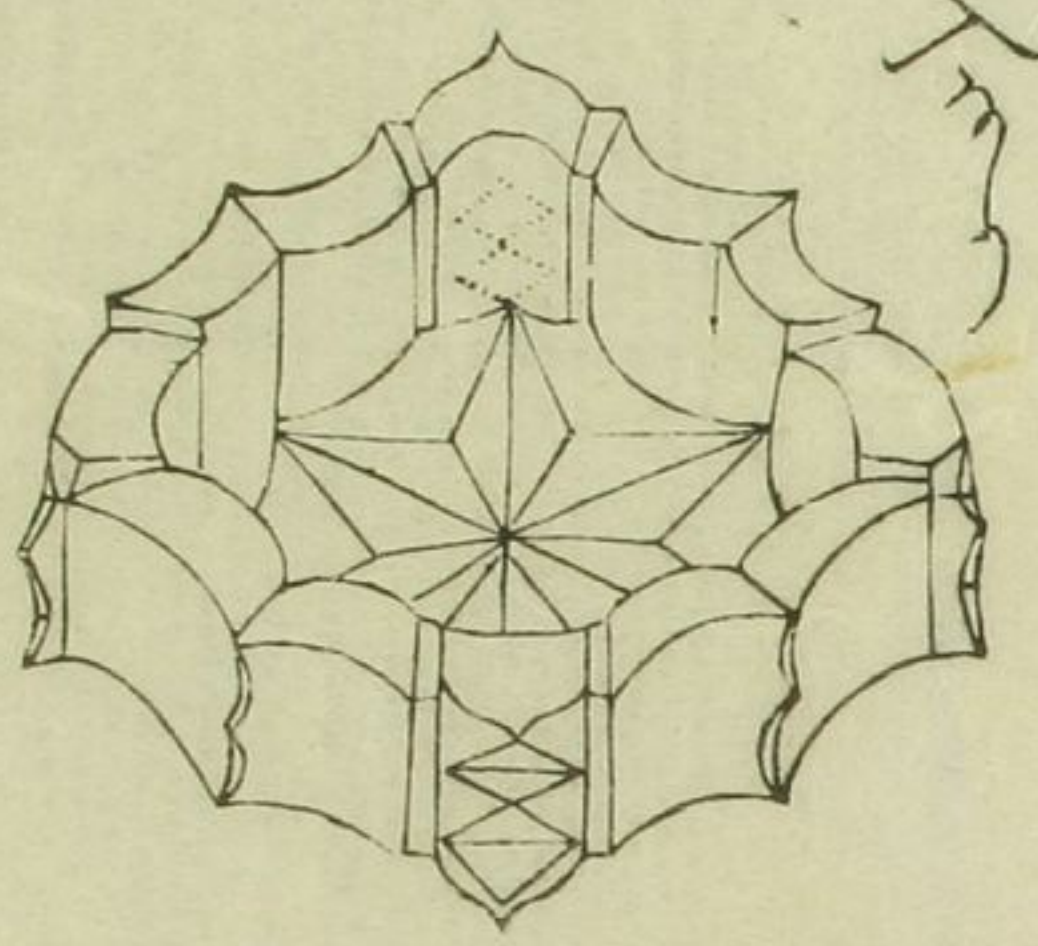
うめしとらんかん



まわきみく
「も。わ。あ。と。と。」
水をいそま。

なうと。も。は。と

食盤此よりおく
硝子きりこ様
木不入り



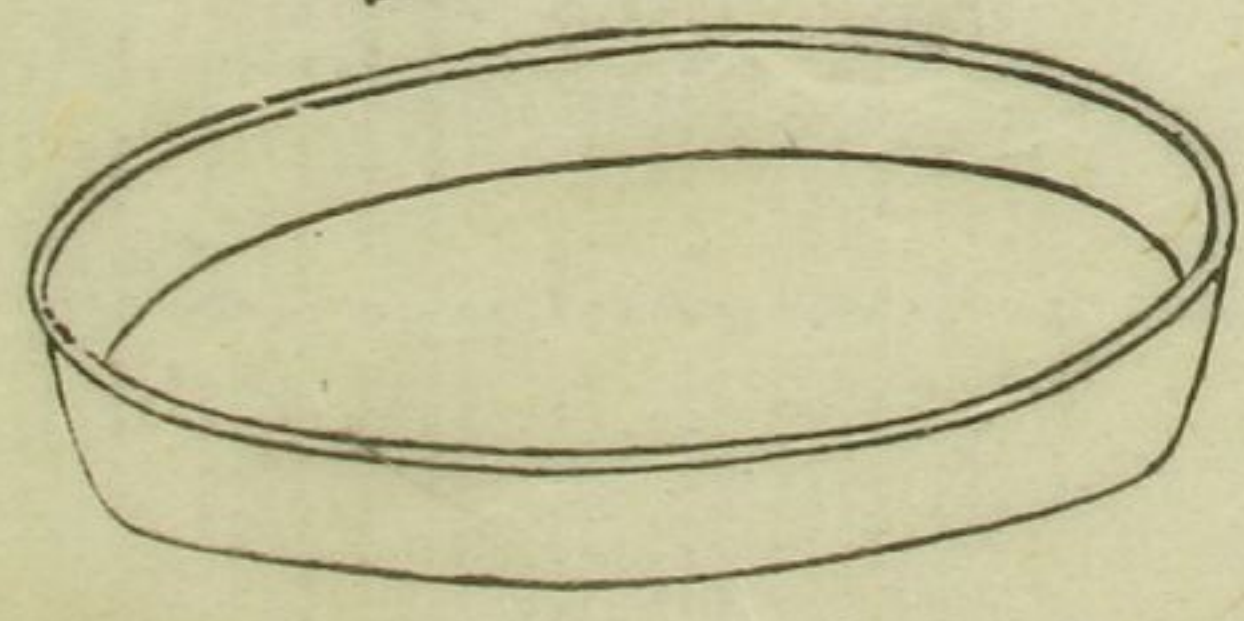
らん。い。て。り

水うしと交る器
去輪をえ作



漱のら。用。ひ。あ。き。の
う。わ。

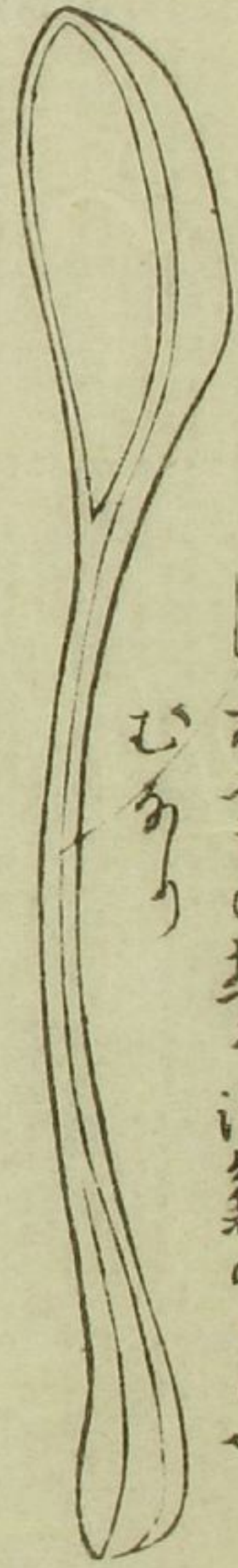
蓋と。又。う。わ
と。り。こ。ん。と。ふ
報。ふ。と。は。ら。



食盤三具

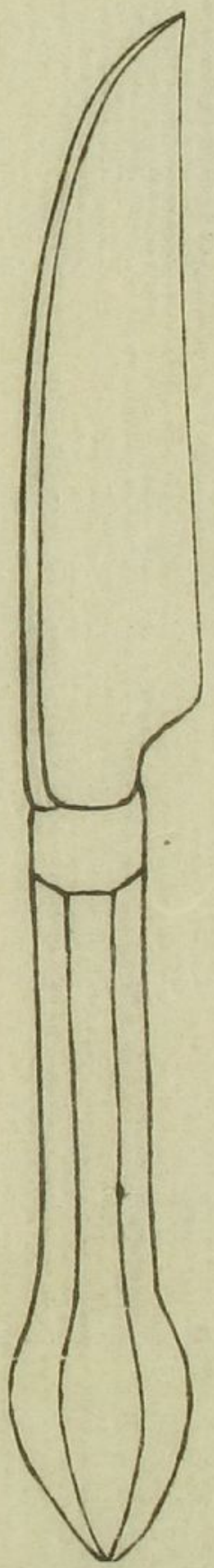
「きい海ふ」

食匙より根鉄輪ホコをきり
わつこのおろ汁氣のものやく
むあり



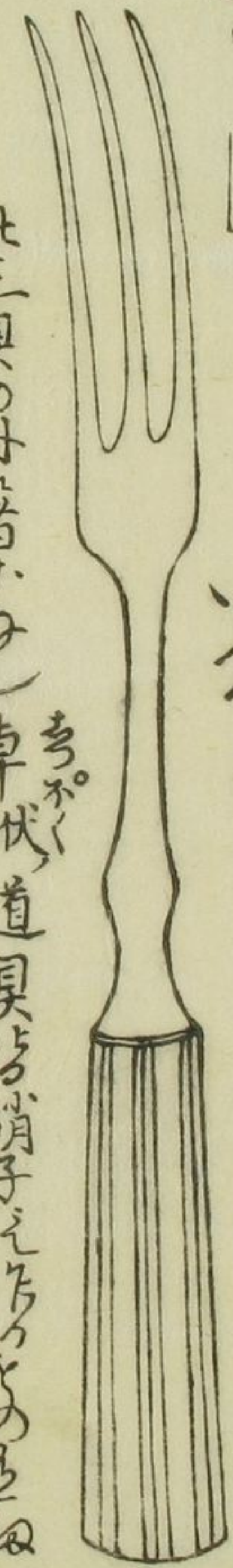
「めす」

庖刀かり丸たきの肉類をきるを食ふ



「おろし」

物との蓋をこし食ふ倍よ肉さしと
ふたり



此三具の外箸ホコ卓袱道具皆硝子を作るものを取

「ゆき」を多くを硝子に友口有り「おはし」を

「きり」を木皮を作るより口有り「おろし」を

「おろし」を「おろし」を「おろし」を「おろし」を

木状より出より柔軟にして鏝口へさるをよしく

固密にしてありしものし

「こ」ゆといふを元茶碗にどと記すのをいふあり

今世よりいふおのゆをんで「け」き」と称するこ

形よりいふく衣わをゆきとよこを本名

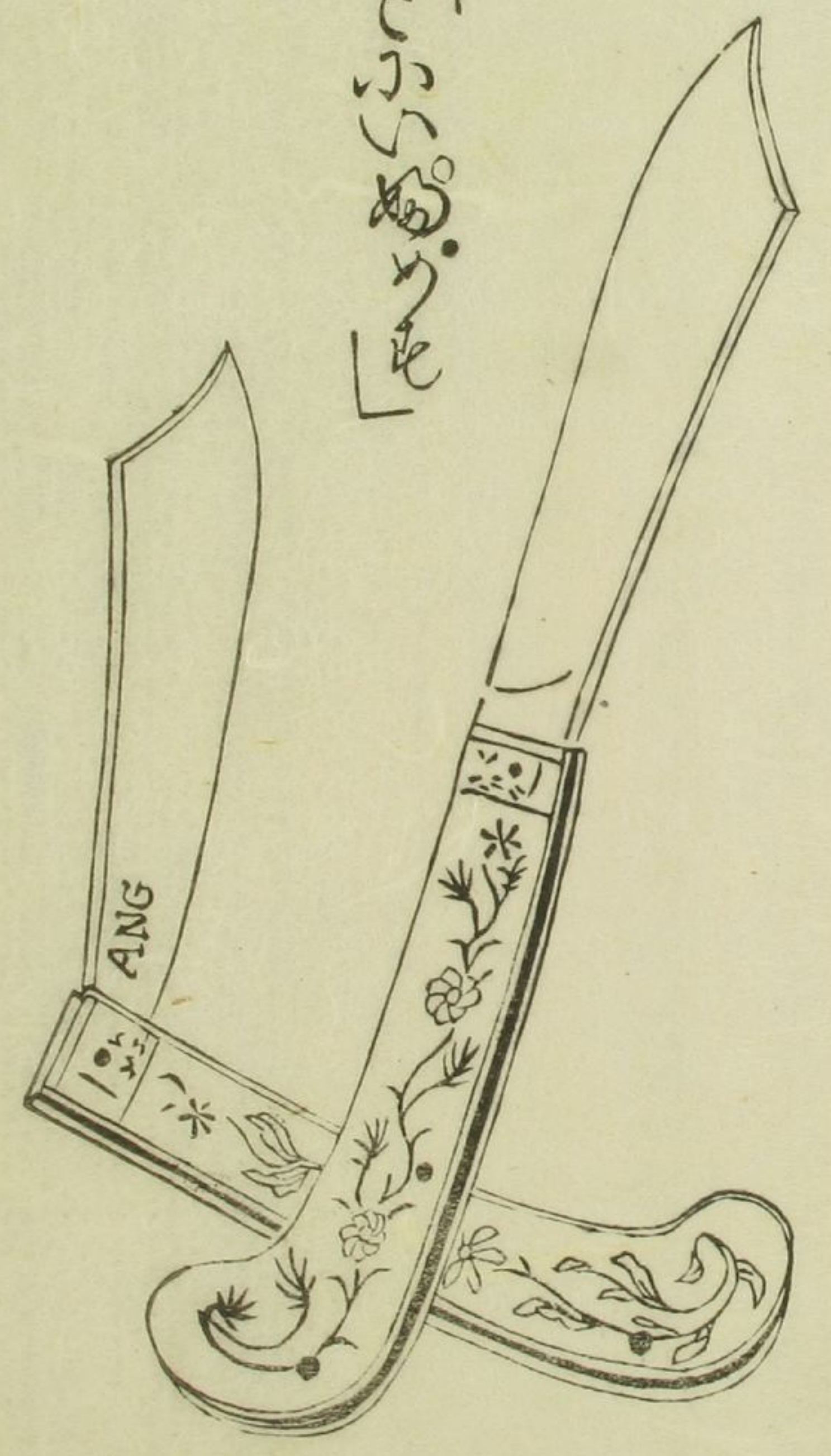
上野の事
二
三

ぬれきく「はちろー」の類乃ものろーをわしど油菜
名酒かどいしびいざらうつ硝子器とろろろー諸圖づをか
てろ後と示とありをえろるー

○しあわろ

問曰ちんご和菜細工は小刀は方こそ「しあわろ」といふをなろ
や 答曰「しあわろ」とは釣つぎれろろろり世ろしよ
「しあわろ」ときふいぬめり」といふ「きふいぬハこま樞かぎ機まきろ
きー「しあわろ」と刀はろろろなり

「きふいぬめり」



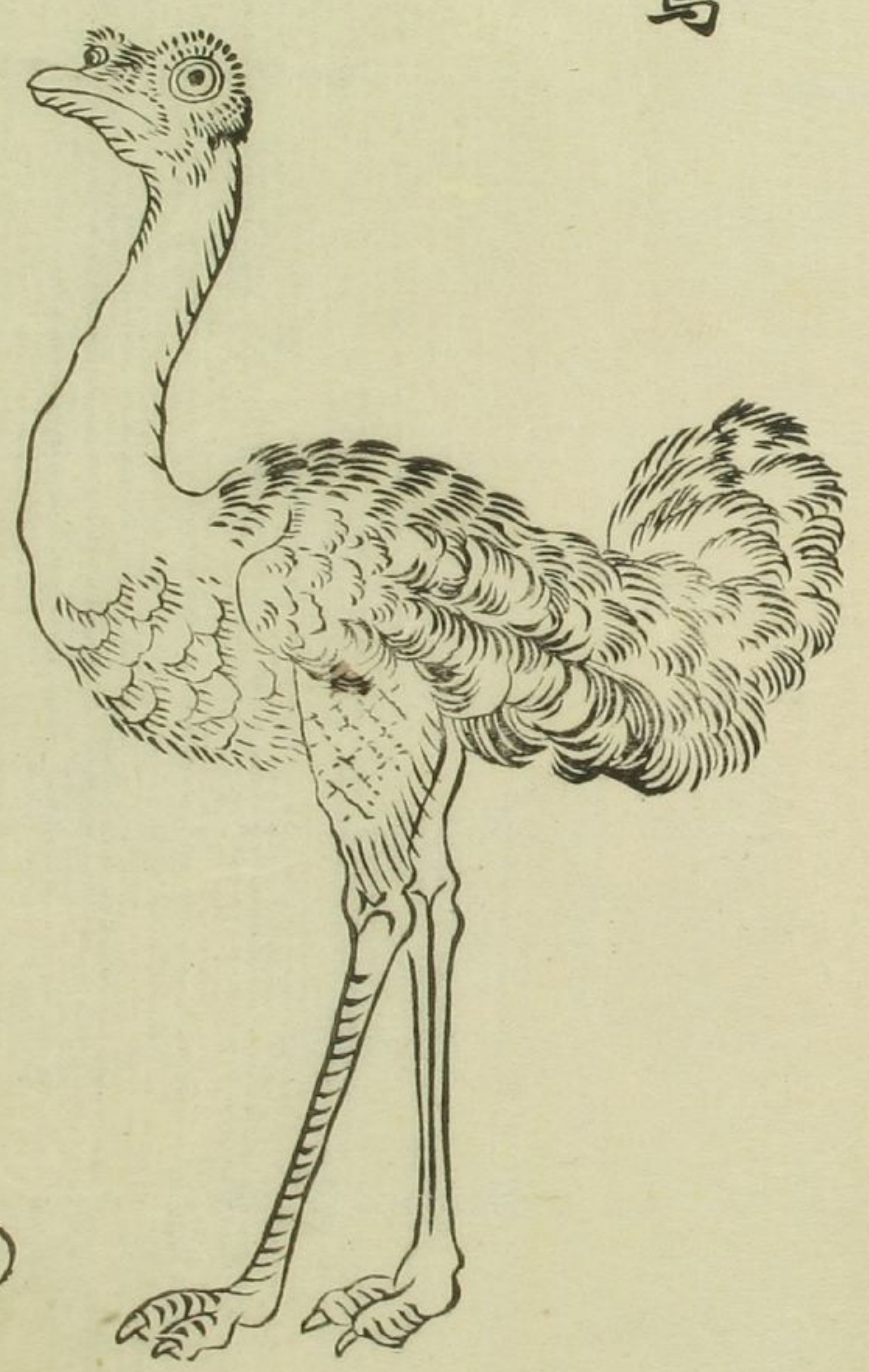
鳥類考

廿七

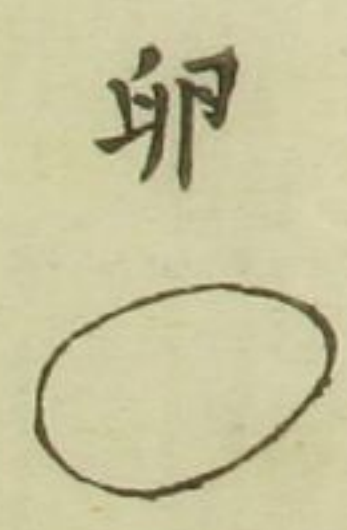
所謂鸵鳥の卵なり此の世に於て禽類の
巨鳥なりといふ其の卵杯蓋系より産する卵は
いさゝかゆで余流し一蘭畹摘芳中ニ因流し
て之を卵とせしむるなり

甲く曰近年和蘭に於て鸵鳥といふ大鳥を
其のふしと法所より持わたりありしを「
いそがわら」なりや
その種類より鸵鳥とも云なり李氏本草ハ

鸵鳥



其名「花」といはる



鳥類考 上 廿七

びりしと「びりしと」乃結群して胆汁は草なり
何とのれ膽汁して末茶と煉りてその名を
びりしと「びりしと」呼ぶものなりや「洋」

○みりし。うふとある。魚いしひしう。

さあらん

甲いしと世ありしとみらと移りる葉ありしと
乃説多し「いふ」ものなり 昔といしとれ
を本名「もみわ」といふは「木乃伊」とる

澤をこし「張り」又引んとする。うふとふ

と「うふとふ」はわやゆをい人魚と「魚い」びま
と「と」ふと「びつ」びまい「はあやゆ」なり

梅「忍」りしと「さゆ」ん「和」和漢本草の
説ありや「六物新志」といふ書とありし

て「本草」所「主治」効能を詳し「を」

○びりしと

本草綱目 三

甲子といふ迄末世間「むげう」といふ「むげうがふ」
 おどおどするものわりとさういふかゝるものや
 昔といはくは「むげうがふ」のむげうとわうと
 とつ又「むげうがふ」といふかゝる「むげうがふ」
 と甘草は「むげうがふ」此の甘草を「むげうがふ」はめて
 膏と「むげうがふ」の膏と「むげうがふ」はめて「むげうがふ」
 むげう」といふや「むげうがふ」なり「むげうがふ」はめて「むげうがふ」
 といふや「むげうがふ」なり「むげうがふ」はめて「むげうがふ」

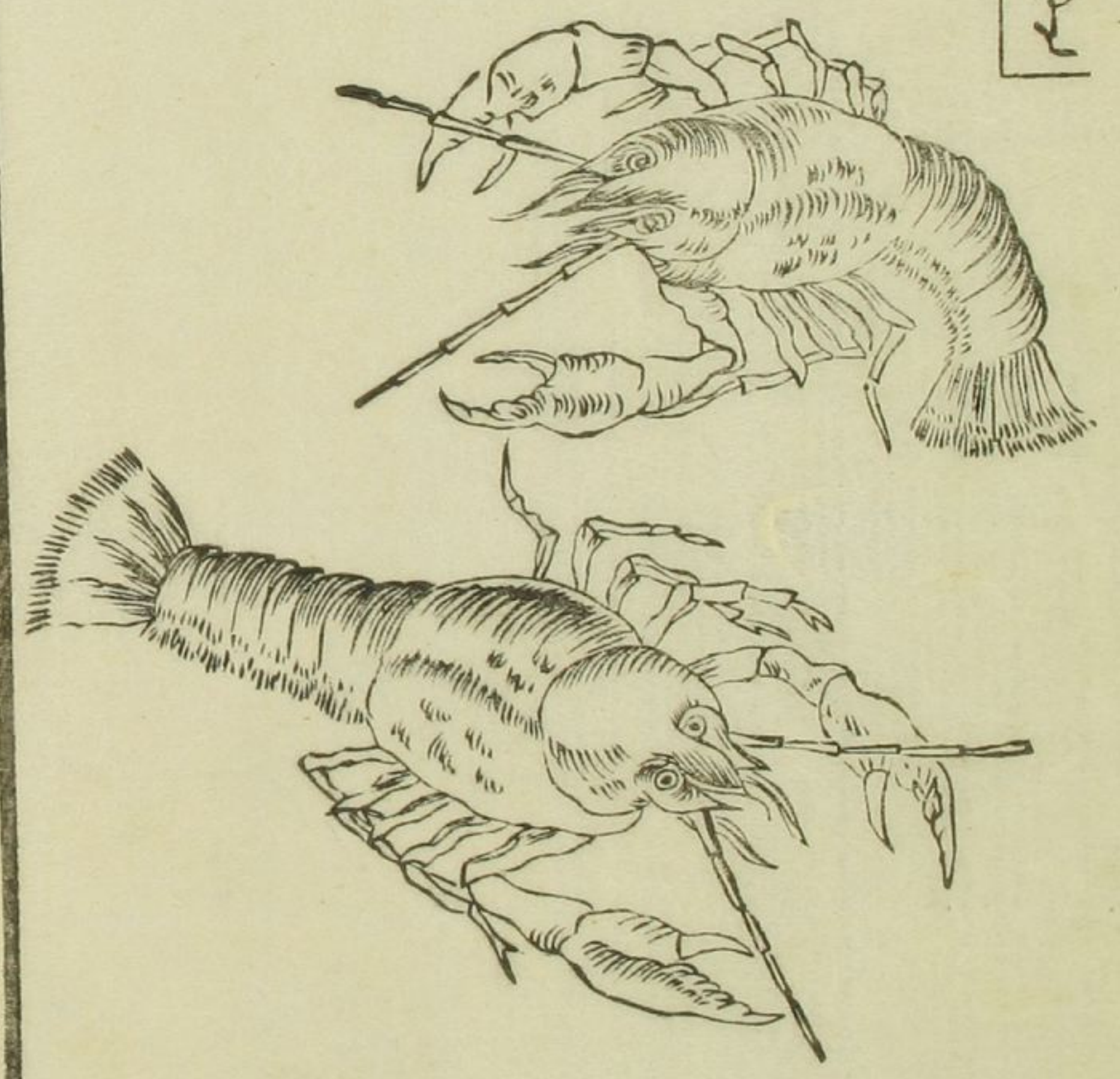
○むげうがふ

甲子といふ迄末世間「むげう」といふ「むげうがふ」
 むげうがふを「むげうがふ」はめて「むげうがふ」
 といふや「むげうがふ」なり「むげうがふ」はめて「むげうがふ」
 といふや「むげうがふ」なり「むげうがふ」はめて「むげうがふ」

○むげうがふ

水滸記

おくらんたて



○おくらんたて

甲くらく「おくらんたて」といふものといふかぶ
まのりや 昔ていふを「おくらんたて」
すていん「なま」蛇「おくらんたて」
と石の事、蛇石といふ名あり大蛇の頭より生し
るる石といふ名ありとていふ安説あり樹
まどやせいさく製作ありありあり葉うん碗てん梅ばいありあり
けむぐり

水滸記
おくらんたて

○ びんざん

向く、けく「びんざん」のひん「びんざん」といふと
 のいふ
 善曰「此を身を樹に脂なり」
 「或は」びんざん「といふ又法葉候合して真乃
 びんざん」びんざん「のひんざん」びんざん「のひんざん」
 「びんざん」とを名を治しきりそのありかゝる
 方各となつていふ「法」びんざん「のひんざん」びんざん「のひんざん」
 法と訣出りそのあり

○ びんざん

向く、けく「びんざん」のひん「びんざん」といふと
 のいふ
 善曰「此を身を樹に脂なり」
 「或は」びんざん「といふ又法葉候合して真乃
 びんざん」びんざん「のひんざん」びんざん「のひんざん」
 「びんざん」とを名を治しきりそのありかゝる
 方各となつていふ「法」びんざん「のひんざん」びんざん「のひんざん」
 法と訣出りそのあり

名あり年ちとせをあ歐邏巴おうろつぱの山やまありありわりの終はつふか
華はの産所うぶところをいふなり

○かぶき

曰いはくわがふを古来こらい厨牌ちゆうはいとていふをれより婦
女子むすめ就すなはぶがびとてありていふをいんご虫語むしごなりといふ
ありてありていふや
言いていふは彼西せい洋やう雜言ざげんかゝるはといふを牌はい此こと
りては昔むかし洋やう私し號ごうとていふをいふは此こを傳つたへ

一いつらおんご私し系けいをもとていふはかゝるはといふなり此こ余
梵漢ぼんかん諸しよ異邦いぱうの言語げんごが邦ぱうの常語じやうごとなつものなり
一いつらおんご私し系けいをもとていふはかゝるはといふは白はく石せき先生せんせいの東とう雅がありては毎まいび
うかす

○うなれゆり きやゆん

甲かいけくうかのありていふはゆんといふ名ありては終はついふ
答こた曰いはかなのふふをて竺てん竺てん一い属ぞくなり此こ地名ちめいなりその
地ち一いつらおんご私し系けいをもとていふはかゝるはといふは西せい洋やうの雅が名なをて

新編
南紀

カ

ゆらそす」といひ和蘭語オランダ語として「ゆらそす」といふと
 の血石とのみ草チトウなり止血と外チトウのりく功能あり「
 ヤゆん」といふは「ぢあゆん」となり硝子類を彫鑄ビョウコウする
 此石を用ゆ一體玲瓏レイロウなる玉石なり列レツして譯説ヤクセツ
 わり摘芽は中チウより出せ

○わふるいと　うすていら

つていらくわらぬいとカキてつくカキなごの葉子エフシもを
 とズン製テイなりや　　まていらくわらぬいとカキ

右ミの佛郎察フランドルといふは漢名カキ砂糖サトウなり
 名ナわらぬいとカキといふは糖カキなり「うすていら」ハ本
 名ナ「うすていら」がらふどカキなり「かきていら」は珠カキなり
 「ぢらふど」を存カキし「ぢらふど」なり「うすていら」
 耐カキへるものなりと軍陳長旅カキなり「うすていら」は
 とカキ

○わらぬいと

うすていらわらぬいとカキといふは漢名カキ甲カキとカキ名カキあり

本草綱目
 上
 三六

だくしきの説いん
 昔ていよく桃は類か
 てせろりあるものをか舶来の核仁なり和蘭の
 名わゆるでんしんとよみの詞を轉ざるまう支那よ
 てを巴旦否孟桃るまうりやう

○番南瓜

甲くいよく近年番南瓜よく民列して常食はふ
 らのわり元地名なりとよみ地方はげよく屬さる
 らや 昔くいよく東藩塞なるべり一名真

臘といふ印度より屬さる地なり此瓜の種子むく
 土地の産をくくわききくを地畧を去穢
 風土記といふ書より詳かり

○ほろとがふ

甲くいよく倍り續隨子を「ゆり」といふ又抄後
 ころは健康よりもわるとの油といふとのわり願くを
 その正説を問ふ
 答曰「不」といふを
 和蘭は地より西隅よりある國は名なり支那よ

かか
連花實圖



けふとがらぬ
本名「おまいぬがらぬ」
「おまらぬ」のなまらぬかと

藤花新志

二六

野生
おきいぬ。

は
う
心
枝
原
図



○こきんふよ

ついでに糸衣いとえを「こきんふよ」和名海椰子うみやうこといふ物
をいふかきものなりや 昔て曰こきんふ椰子
の一名「こけい」をといふ名ありその轉てんなるか
ぶ「予海椰子考」といふ書を著してその由を
詳くわす

○さうてこか

曰て曰さうてこかといふものあり俗とくに「式しき角かく」

楸スズキといひ或は葑草フクソウなりありといふ元トク蛮名あり
 日ヒまといぬくその説セツいふん 昔曰く後ハ瓦生ヒシチクは
 ぬり「むぶて」を本は事「こぬら」ハ地チは事
 和蘭オランダ詞ゴハ「らんがわう」といふ地木チノキといふなり
 唐タウは書シハ地皮木チヒダクといふものこ後コなりん今世イマのありて
 を別蛇本ベツダホンと称ナるるものありて、角楸ツク或は地チを
 「うてこぬ」といひるるいふるはあり

○赤やぼん

曰て曰石鹼セキケンを赤やぼんといふなり

昔々曰く後ハ西洋雅言セイヤウガケンの「さか」といふの物モノを
 うかり和蘭オランダ語ゴは「セ」ぬといふあり兼用
 あり多く「セ」ぬんせせいぬといふをけふあり

○安産樹

曰て曰世界セカイに安産樹アンサンジュといふものあり産ウる時トキを
 水ミヅに浸ヒぎて出産シュツサンとせしむるなりといふなり
 そのあり

○てきせんでいか

白曰「てきめんてい」かといふまのを何ものなるや

善て曰是を樹乃脂なりは邦に縦は来れり

なる本は品類二三種ありの本名「てきびんち」か

なり和名詞よく「ていぼんていん」といふなり

も指記を列し「譯文あり

○「てい」は「てい」

白て「てきめんてい」は「てい」なるものなり

なるものなり 善て曰これまを笠地あり

産する「てい」は「てい」といふはごものありき腰中

「てい」は「てい」といふは「てい」といふは「てい」といふは

「てい」は「てい」といふは「てい」といふは「てい」といふは

「てい」は「てい」といふは「てい」といふは「てい」といふは

「てい」は「てい」といふは「てい」といふは「てい」といふは

「てい」は「てい」といふは「てい」といふは「てい」といふは

「てい」は「てい」といふは「てい」といふは「てい」といふは

蘭説辨惑卷之上

○ぼろろ

問曰がうとるとな何ぞや

善て曰く牛乳し

初文邪まきいふ酪ラクなり歐羅巴オウロパ人常ツねく食料
となすそのえけかまごまご功能こうのうありとみなり

蘭説辨惑卷之上畢



蘭説辨惑卷之下

盤石水先生口授

門人

福知山醫官有馬元晁文仲筆記



○食料

曰ていよく私蘭人食料しらんじんをいふかそののまや世々よ魚いさな
食たむるそのを唐人たうじんがごよといひ又燻くわん茶ちやを多おほく

蘭院律感

四

吃^くむるものさゆと唐人がごとくといふ

暮^くていづく、英^{えい}國人^{じん}を牛^{うし}乳^{にゅう}乃^の類^{るい}を常^{じょう}食^{じき}するといふ
外^{がい}のり起^{おこ}るなるべし是^{こゝ}を中^{ちゆう}ん^ん支^し那^なと稱^{せう}す
外^{がい}はあそはふ食^{じき}料^{りょう}とか此^{こゝ}のなつ我^{わが}邦^{はう}を以^{もつ}て
油^{あぶら}を更^{さら}まらる國^{くに}の海^{うみ}に産^うするものよそ自由^{じゆう}に是^{こゝ}の
一^{いち}山^{さん}乃^のもみむむいしより用^{もち}ひぬ米^{こめ}と見^み以外^{いがい}外國^{がいこく}ハ
多^{おほ}く地^ち流^{りゅう}き^きに海^{うみ}あり油^{あぶら}多^{おほ}くへきさといふよそ
てを百^{ひゃく}里^りより三^{さん}百^{ひゃく}里^りふいよりと稱^{せう}す油^{あぶら}は物^{もの}なり

て用^{もち}するがごとく身^み物^{ぶつ}と法^{ほう}に任^{まか}せ物^{もの}を食^くふ
とすしものさゆと猪^{ぶた}など食^{じき}料^{りょう}なり
天^{あま}より生^{なま}トおろしものとおもはるるは我^{わが}國^{くに}
よそと山^{さん}本^{ほん}路^ろ山^{さん}尖^{せん}かど油^{あぶら}をきさる所^{ところ}よ
さるる塩^{しほ}をのあを常^{じょう}に猪^{ぶた}と食^{じき}ふ所^{ところ}なりといふ
先^{まづ}と回^{まわ}り米^{こめ}なはん支^し那^なの茶^{ちや}院^{いん}を調理^{ちようり}する食^{じき}
料^{りょう}は根^ね子^こを同^{どう}くする俗^{しやく}なるを呼^よぶといふ
了^{しやう}ぬるや回^{まわ}り考^{かう}するものよそと鷄^{けい}鴨^{わく}牛^{ぎゅう}乳^{にゅう}は

類も性固く人好まざりとするものと常食とを
むも調理のきつといげととよく熟煮して用る事
て必しと生煮のつひを鮮肉は拍味なれどとき腸
胃へ入て消化ししきとれは食どと我れ茶人
などを獸魚とて異形のもののみくびりしるを食
ひはあゆめとのを甲斐のものといふは食ふ事と欲せ
どとなり鯨鯨章魚烏賊などいふ根のものを食ふ
ど魚と棘鬣魚比目魚鱒鯉の類ありといふも稚子

危なご云々其脂はよく有毒のもの多くを用ひど
となり犬馬の糞を固うり食料となせぬ事なり勿論
飲食し常度ありて必しとこえり豪酒飽食は
さぬといふ故ては人の平生鮮肉を食ひ市井
無頼の後いふやうに松魚二尾をばくせりといひ
或は汁一杯の酒を一頓しとていふをばく
を彼人共をも且嘆とんごうやぬむごを多く吹く
といふ大頭乃大さ本長管を用りていふなり

だ——金作取きるを瓷器ヤミモノ——して長管ふ——
 きりも久——脂ヤユとせめぬ工夫クワフしてそや、りよ
 碎布ヤミ易き取——し——なり長さ尺カガ得よるふゆ
 煙氣ケビの咽のんどを薫ウケぶる才ウセと為ウセきやうふと考へき
 なぶ——大頭ヒダウふいすウセと管ウセ——色ウセぶる穴あかをて細く
 且ウセそのふむことしきものまことゆびこして烈毒ウセと去ウセり
 乾ウセ——きりそのよ——を彼人ウセの煙ウセ茶ウセを服ウセぶるた
 煙ウセを吞ウセこゆども吹ウセかたなる是ウセ常ウセ——頬ウセを洗ウセす

ゆくゆを——して二三吸ウセえそやむなり此ウセおれ人のこと
 く短管ウセ——して行住ウセ外ウセ用ウセのがむらふ——きりて
 わどとまりの此ウセ辨論ウセ予ウセ、葛録ウセの中ウセ——詳ウセ——と

○黒坊

何ウセ——私茶ウセ私ウセ——家ウセのや、黒坊ウセといふものなよ
 水ウセと溜ウセ子ウセ水ウセ鍊ウセ——長ウセ——きりそのといひ又ウセを猿ウセの類ウセ
 ちうといふま——物ウセや
 といふの々ウセ天竺ウセ地方ウセの各員ウセ民ウセなり和蘭ウセ人ウセ志ウセやがう

そそ召仕ひりてへあつて彼地方所の人よ
て皆南極出地の國ゆゑ甚く酷熱此國くなり
て後ゆゑ身體日く照ほあつて色いよつて黒
し且卑賤なるものを裸體をせし陰處をけり
かりしをけりなりといふも拳毛みよりのわつとや
釋迦なども天竺めうら則意蘭といふ海峯大熱
地の産まぬ頭丸螺髪なる色炎熱をせし裸の
つらつら其餘五百羅漢て我を祖を或は裸の

人あり土地のけささゆゑなるべし此黒坊といふ
ものも貴賤賢愚けりけりや後を近傍同國
同種の人て人間ていふものなりといふ
水鍊て長ざるといふものを人外のものなり
ふりてあつて和蘭人銘々各自僕て
取合次第て用をもちていふて食事を給仕諸
使は類ありて縫もの洗濯水汲米搗厨の手傳ひ
何といふ差別をなす和蘭人「てらとよん」といふ

蘭人傳

下

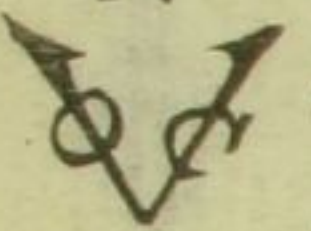
三

廣言新志

「すわり」ともを黒ひま「うんご」といふも少者なり
とつひものといふ奴隷僕従はさすべし一私中私
働もるな「ゆさう」といふ水夫とてく「茶院人」なり

○おんおんや

申く曰庖厨なり「うんげんや」といふすし「うん
ご」といふや「きんご」といふ「おんげんや」といふ
「おんご」といふは洪きりや金伴「うんおんや」と
いふ「うんご」といふことこれやゆきりなり

禱のまをとわひ催合会所といふやうなる事あり和蘭
七州は七王互ひしお催合を諸国交易乃望をぬえ
そとくく乃法役人と指へ滴くのあつもの仕買物を仕ぬ東
の法玉へ高舶とて東玉をえありしむ瓦器等の
うら「おんびや」といふ所又望を喜て場をゆへ「おん
ご」を「おんご」といふと「おんご」といふと云ふ法玉
催合望といふ事なり「うんご」といふと「おんご」といふ
N  ちき記誦をばく「おんご」といふと「おんご」といふと

三才圖會
卷之四
火

三四

此といんぢいせとんこびどぐぎ」といふ四言梵字數
うて三十六字のりやみ頭字うらちなるをさるるをよむ
ふ和蘭文字なり則和蘭催合坐わあひざといふことなりと
ぞ此ありて官物に用ふなと書なると同なりと云ふ
ふー西方諸國のゆきこ此所なりといふ

○ふとまきてふ

甲といふとふとまきてふとて人の體より火とてなる具
ありといふいふなるものや 昔曰此圖をばて

一森崑氏のわりのをさるの紅毛雜話に詳なりを
「ふとまきてふとい」といふ語の轉てんなるなり和蘭國
語をてを「ひゆふる」といふのりく」といふ人の體よ
り火を取といふとてふりてわりのとふとてのりよ
てと火出ふなりとては金石のりしわひて火を生
ずり此理ふしていんちゅうねいんちゅう燧金火打石と云ふなりゆきよ火石性
力に名わりのなり天地の氣相摩して電光の
のりつけり此理を示しとて道具なりとてその

三才圖會
卷之四
火

七

東洋新書
三十四

さねへわらうそのより火おわらまわらどたをよ
り火乃おてゆき所よる火後するなりかくれ理
わらうと山ていつて怪しきおれをけりづ理を辨
まて火乃後よりやう巧に出る器なりををさ
理を朝夕毎家り用ひ火打石とおなりことありと
知るべし

○景画燈篋

ついでとより新造燈篋といふもの和蘭にて

そのなること暗室中、小燈をおり然し仕置あり
しやゆふと掛とあり白地なりやそのものしやゆ
味をの信ありけり人おなまば希れ人の長はどよ
て候いあるがども能なり候といふものやいふは仕
かけなるそのものや
和蘭にて
と後を「しやゆらん」ありといふ釋をまじやと妖燈
といふことなりとや元、兒女子は玩弄の器なりあり
しやゆけり小箱ハ先をすしその内ニ火を點し

其の透洞へ硝子一画きり繪を逆伊こく入
どお影轉倒して向あう地へ順一うけり
且形大一なるか？ 一後を眼といふもの萬物未映
して内一景と道理と同じくしてそのもので
見てその理を辨ぢて速一解するなべ一理一
味さ人々々々解一がことこのゆゑ妖燈の名
わたりや

○殺活車

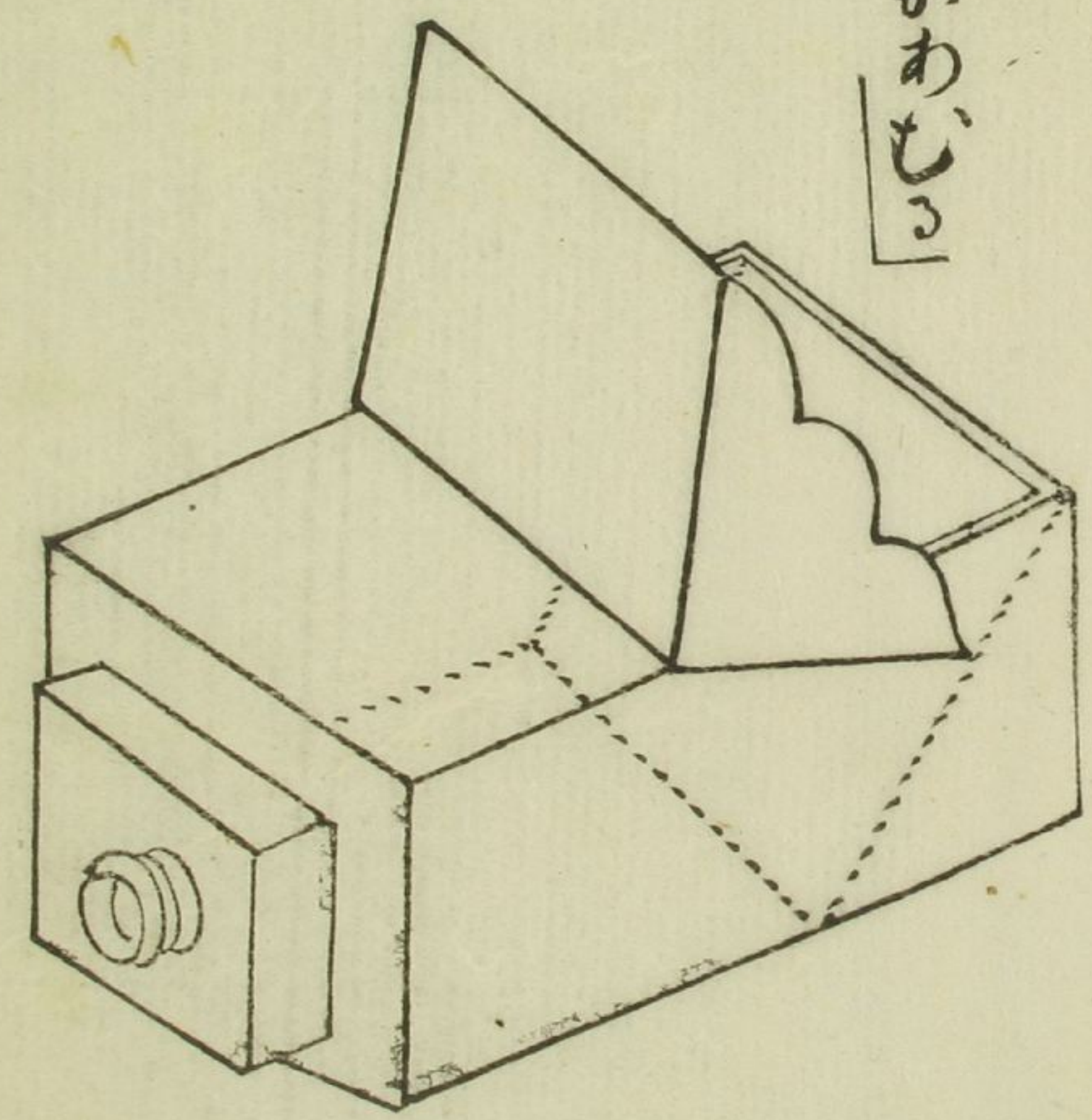
回して一儀一死活硝子。殺活車とて硝子内へ氣
融系に生物を入き死活をなさしむる器を見り
一後をいなるそのみや
答曰こ後と「脚くとがむ」といふ器なり
ことゆゑ一生物なる天地に大氣中よ立てその
空氣を呼吸して死活をなす其理を示るる器
といふ彼國理学家の製するものなりて一窮理の
書一 因沆わうとや

上野寛肆成心
下
三
四

○写真鏡

甲いんく。茲にうしり硝子の鏡を仕つけ山水人物を
うつし画ある器此ありて写真鏡とよぶものあり。
元々蠻製のうしり硝子とよぶものなりや。
是れ曰く我々「どんくわわむふ」といふ器なり此は
家と往々擬製ものありおあり甚ど工夫しつゝ器
なり。是れ写真鏡の各所をゆきつといふなり。
黄履莊は臨畫鏡と此ものなりといふ。

どんくわわむふ

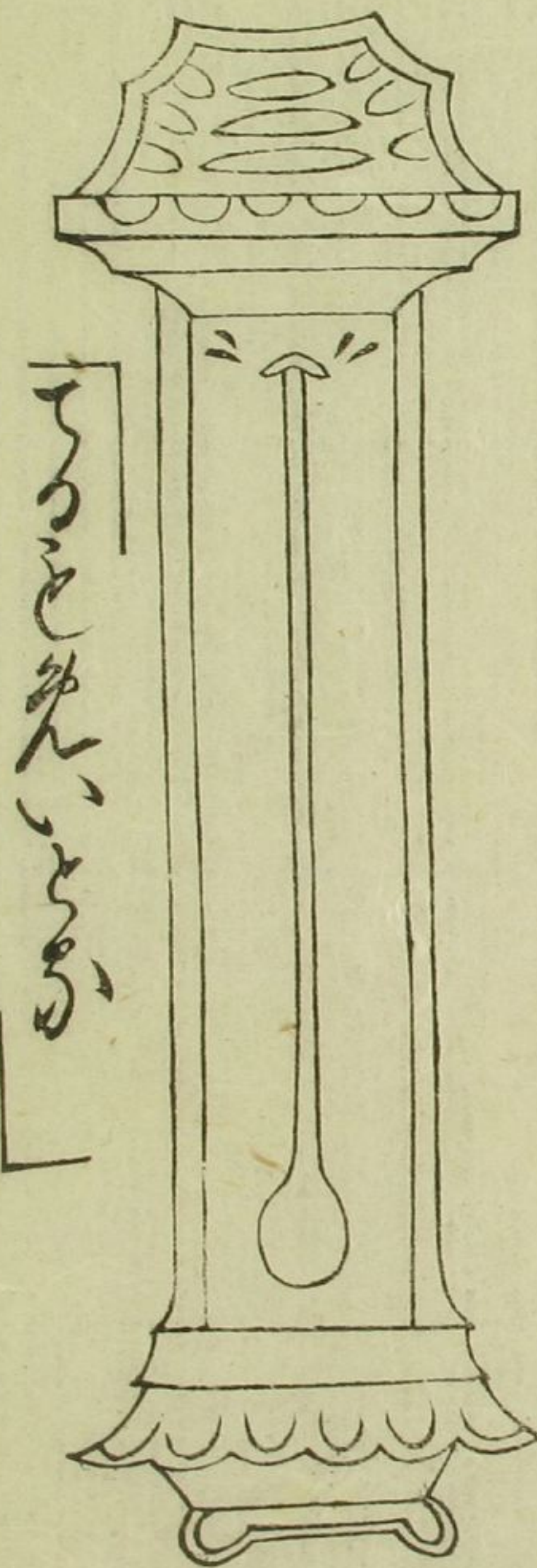


上野寛肆成心
下

○升降水

甲いこく寒熱升降とて硝子水管其下底を球
 一造りて其内ニ薬水と収めを暖ふとさびとの
 水外溢るる器ありと後々何といふそのよや
 昔々曰く後彼邦にて「てつとめいこく」せよ
 黄履莊と創製せりといふ驗冷熱器といはるるを後
 ちぶべし此方一せとぶりて製しとてを熱升降
 と名づけりしを平賀氏なりとこころなり此條驗器

種々のありて其陰晴を知り器あり「うんいぶく」
 といふものありと後々所謂驗燥湿器なるべし
 ゆゑ凡そ此器なり「どんどうがく」などい
 ふ器ありといふも製法を理字ありしものなり



てつとめいこく

○らんせいゐ。ざんごふさ

問ていそく外科者流常て用るる針を「らんせい」といひ吸ゆくを「ざんごふさ」とりふさまた其の蛮名なりや

「らんせい」は彼人を「らんせい」と呼ぶらんせいとを其轉聲なり此器乃名のこゝして此辭他義かし仰こざんごふさを彼方乃雅名「ざんごふさ」といふ其のふなり和蘭國語「らんせい」といふ其の

用漢土は角法とあり人々志す所なり

○入津は始并長寄旅館

ひうしそく和蘭人を初め入津のりいづはらんせいとひうしそくを長寄とすや仰こ彼地いふかゝるや旅宿なりや

一、^いおきりとなりては竟永年中一回国を漆
の漆うるし一々こととなりぬとかいへば二百年も
及ぬことか又かんがひ盲昧なる婦女子は漆を賣る地は
概しおぼし又と此は病人と病人とまがひ替り居る事一の
やうとおもふ者となり大なるらちびなり清人お
らん友人ととり居る辰館あり和菜人旅寓ハ
同所江戸所とい居るまの海岸に築か一きり小
寄りの名は多しお寄るといふ所の北の小に向ひつら河

流役人お入此門ありて此地の西川氏を漆取役をいふ
書りし之を詳よきをぬ清人の辰館を十長村と云
所を漆の東の町といふも又柳の寺といふ所あり此
一唐船ちやうせん名岸とせれいふよあり大徳寺といふ
寺ありその下谷尾此地あり右のこをいふ所よ
て小島といふ村ありは村と寺との間ありお寄りの
を地面よとてお寄り見ゆるなり余は東本寺を
一河彼地とて一用板一ひさく所れを漆うるし漆を

漆の事

二

初秋入津の後七八九月三ヶ月のるを考ふるのうらまを
種く此代物留佐舟しとぞ今來のるの秋入津はと
の去年以來出考滞る此ものと交代し新びん朱
墨乃御湯の書記役醫を携へ凡そ三人を糸向と
いぬ

○糸向のびん朱墨書記役糸科

甲くいらく年く江戸へ來るびん朱墨といつたは官職の名
なり此又わたり何ぞの義ありとてしや

義曰「うびきん」といふを政役といふ事一なるや
彼方の推言して「うびていん」といふ和蘭國語してハ
「おほゆるほふゆ」といふや一は後を頭とと長と
といふがさ詞のまをて凡て頭役此ものを何ふくの
かびていんといふことなりとぞ一^{せんが}縣長は事一とも「ら
ひていん」といふなり此「おほゆるほふゆ」とを船中交易
物の事一を^{つぎ}惣司といふことなりとて書記役と
いふものを彼國に詞り「わ」にて念とてお中

ようにお考ゆぐハ大考考りて了る事一な後ごとび
 をん入随ひ江戸へ来りて中此頭取うて彼詞を
 「オランダ」と稱するなりとぞ醫者も多く内外
 科を兼ねたりなり其中 外科より内科を兼帯
 する者多きなりと云ふ事とオランダ和蘭を外科
 の術テクニック一長ドをりてを以て諸民此為一醫
 官オランダ官オランダの療術茶方等問難對話オランダありん
 と云々 召呼オランダと云々 召呼する前ハ江戸より

膏藥油茶等主治を通詞をりて毎度彼外科
 ありを後ひ一書をとりてなり本仁大夫といふ
 譯家の祖父に大夫といへばなごまの大夫の詞をりて
 彼を以てりてゆつり一和解書此草稿を余も
 甚喜乃時見きり本一りり記をばりていふなり
 毎去りびんね湯一糸向此節更に彼外科をりて
 あり本よりなりばりてときりり今より三四十
 年一己おゆをを詞と口びりり彼國語をりて

痘瘡麻疹其類外法いろいろいふと愈きうた
らまけりゆりまめといふるれましきし渡海舟
中とて同じことなり外症なりわけて内症を
のり申し居や私申し居る内治外治と分りて
たまわくわどことその醫者何れもし内外科を兼
有するとなつて彼書を考ふに内科は治療方法
にかかけし精密明細の事をして其國名哲に撰べし
所は書影ししわり凡そ醫とすそのを先づ

才一一人身平素此所の一體を知をねる事
と立きりそのゆへ四肢百體外は皮肉毛髪より
内は臟腑脉絡筋膜よりなるゆへ病を解
割しし知るに窮めしことして病因を論じ法
を施ししことなり其書を研究する事は
きまらまびしそ趣きしきなり醫術の中
内科はたよりり容易に修めごとくし
けづしき業ありし全條内科を醫家の中

蘭学
十八

として位階よれとのよし呼び「たぬいとたぬいふ」
 といふ尊號は辞なり一名「とくさふら」といふの
 くれごをたぬとの名あり「私をたぬありたぬいびみご
 ども他國をぬこころすゆい外科とてと良工よむり
 てを同し才なる船あり乗ありたぬい多くハ
 技術一色りそんきりとのえ修業はそめ出世を
 公認る外科、内法を乗来るとし折く「左内科
 本業の人として學術研精のしめ波歴さんとてそめ
 ありてい
 ありてい

来りてをわりのとらうり外科を彼國の詞をて「たぬ
 めいそふ」ゆこを「とん」どたぬけり「と」を称せ
 流どと船中よそそ内科兼役とるあり「とく
 とふ」と稱するなり船一艘あり兩人はりそあり
 とも一人を「おつゆらめい」とり「といひもき人とお
 んでるめいとてり」といふを流を通稱れ家上「外科」
 「下外科」と呼ぶ「おつゆら」をよなり「おんでる」を下
 なる江戸へ来向るたぬの「おつゆらめい」とり「よ

江戸へ来向るたぬの
 一

て別よ、亦科なり、其の地をとも有り、いかにとく
いかにな「ど」とふ」と稱するがごとく

○和蘭及咬啗吧大畧并世界略

ア〜い〜マ〜ン〜と〜ふ〜中〜を〜い〜づ〜と〜あ〜る〜角〜
わ〜り〜唐〜山〜う〜う〜わ〜ど〜は〜か〜れ〜る〜國〜も〜や
ま〜て〜い〜け〜く〜全〜件〜は〜世〜界〜と〜い〜ふ〜の〜を〜四〜つ〜よ〜か〜ち〜れ
と四大洲といふも西〜り〜わ〜る〜一〜大〜洲〜を〜歐〜羅〜巴〜と〜い〜ふ
マ〜ン〜あ〜る〜「あ〜」〜ら〜つ〜ば〜「ふ〜」〜属〜する〜國〜も〜て〜名〜を〜

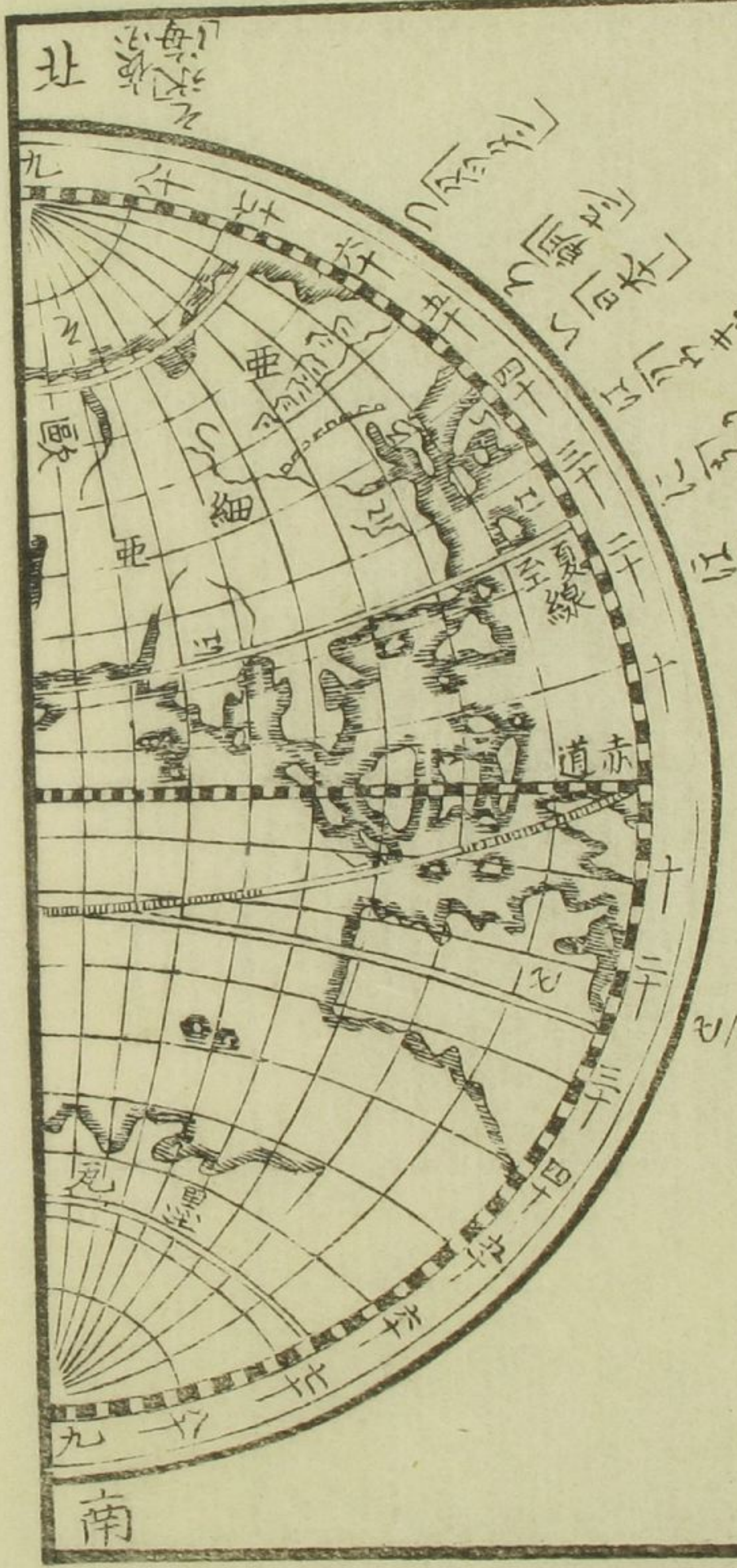
「林いづらん」といふ中、全くマ〜ン〜あ〜る〜一〜統
その玉郡七州の里を一つあまれば、其の字をマ〜
ン〜あ〜る〜と〜す〜都〜は〜名〜を〜「あ〜」〜と〜い〜ふ〜よ〜く〜こ〜ま〜し〜思
て七州を惣稱してマ〜ン〜あ〜る〜と〜い〜ふ〜や〜ら〜る〜三〜州〜ハ
我國より大和國わつて惣名をや、内をたいてつとてし
小極地は十二三度、其の地をキ〜候〜格〜め〜く〜き〜し
日本より其の海程八百六十里ほどあり、教八九ヶ月
を跨るよ〜く〜なり、其の港の地を「わ〜び〜」〜と〜

有りてはと見ゆる航海畧記と云ふものありては
 約一トクニ終つてゐるものなり紅毛雜話とかきし
 正傳きりつる也一唐山を亞細亞といふ一大洲を屬
 東へよりつる國は我邦へは海程遠し其れは地あり
 是地は北きなきごとと亞弗利加歐羅巴は二大洲は法
 小をへてをききとた程教ありては容易といふべし
 ぞえり代一おれはといわふ國は北を北きくきんと
 許多の人教をわしきりふ大なる湖はわつ所をいつりて世

界をえは北の地なりとて海ありとては北の大湖を
 所謂小なる湖とてわつととなりては北の地より
 是北の地といふ地なりは北の地を用ゐる人々
 辨じりてはと及ぬ事なき事なりとては北の地
 一やうよまをきりては北の地なりは北の地なり
 一を北の地といふことなりは北の地なりは北の地
 図をわしきりては北の地なりは北の地なりは北の地
 ありては北の地なりは北の地なりは北の地なり

地球全圖

地球畧全圖



亞細亞

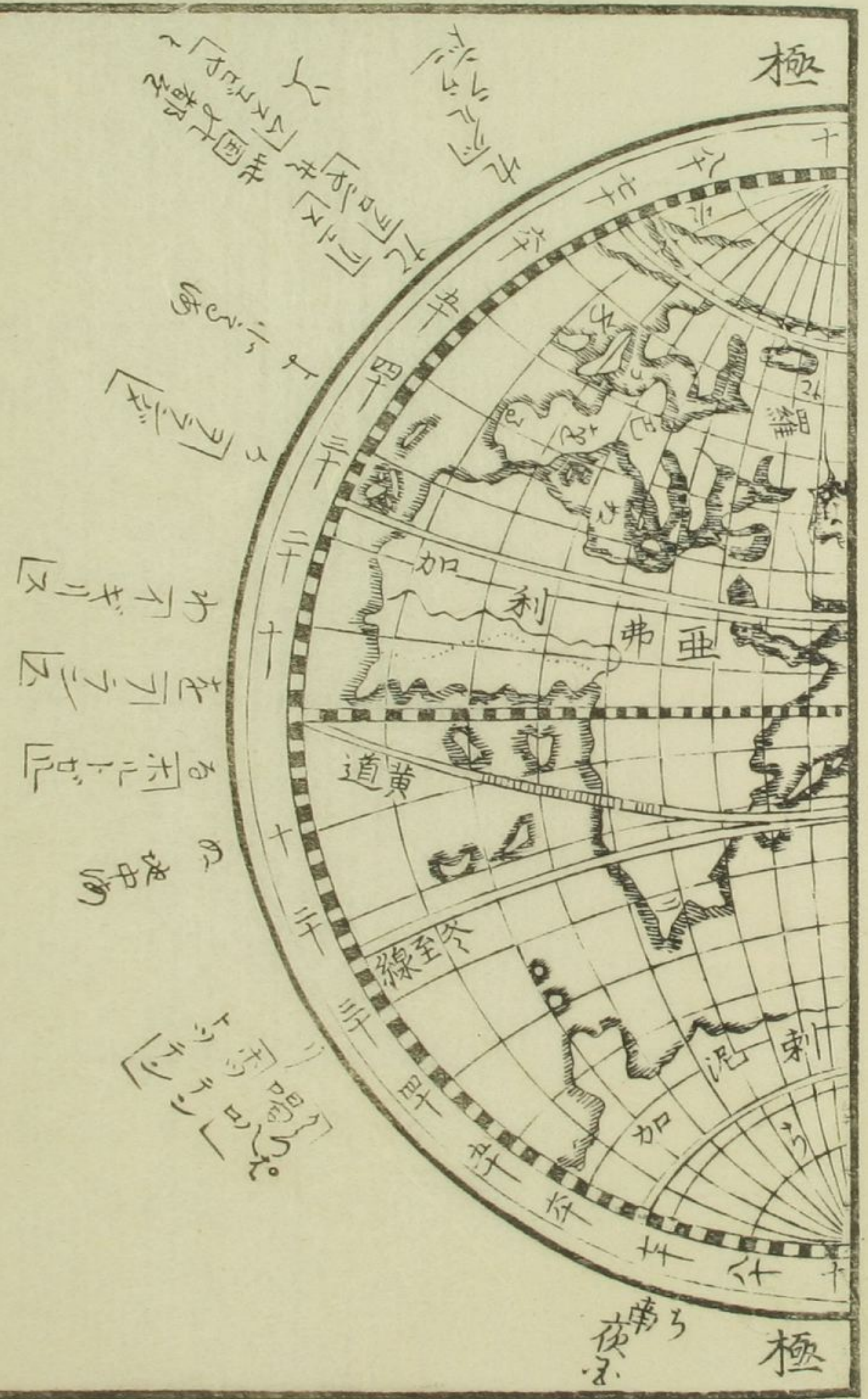
歐洲

北極

南極

極

極



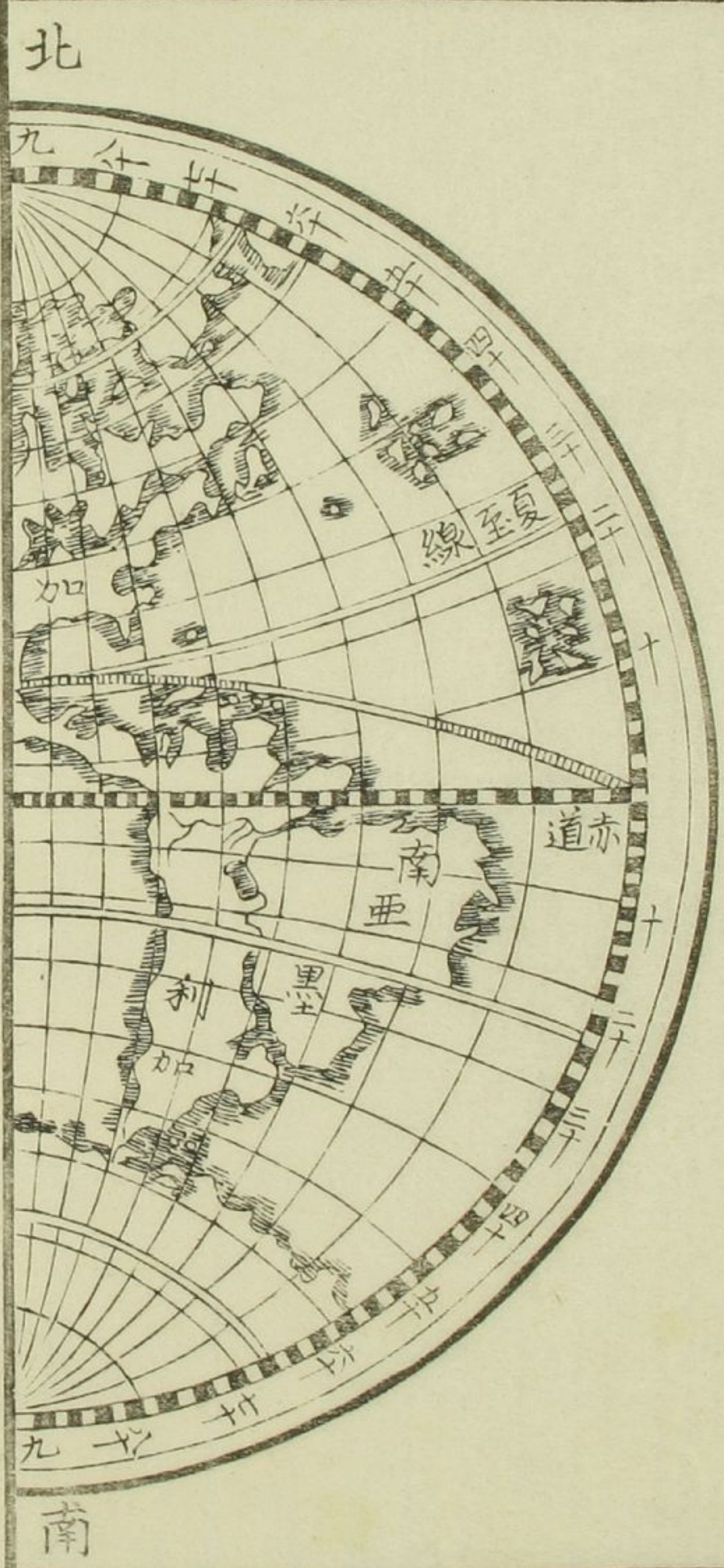
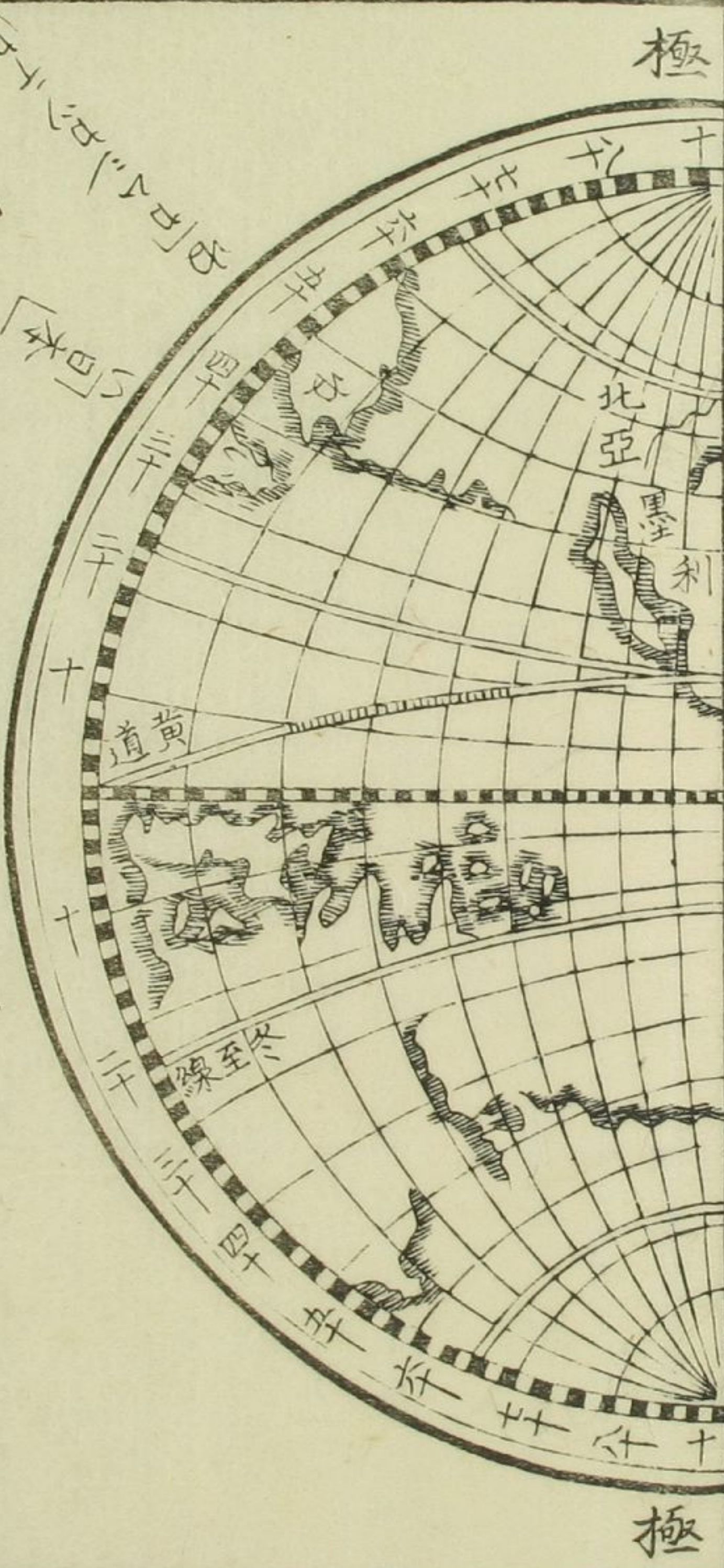
亞細亞

歐洲

地球全圖

十四

我午之老為支人越邨子虛寫
 於江戶客舍岳山川邑



右略地圖中一二志を其所の
 玉^{くにの}號ハ、俗同海稱又志^たこふ
 正^た號等^{さか}詳ありことハ精圖に於て
 て考へ一は國ハ日本支^{から}那^{えん}天竺
 志^あやぐたら「おらんじ」等の方位を
 志^あ免さんきめり申^まり右
 五國ハ朱点を加ふ余ハ略也

蘭說辨惑卷之下畢

附錄

鶴齋杉田先生六十壽序

今茲壬子鶴齋先生年甫六十矣今嗣士
 業開壽筵先生嘗學蘭化先生首唱斯業
 于我邦蘭化先生亦齡七旬迎而偕壽
 之欲賀斯業之肇基兼佑其嘉觴於東
 金蘭之交暨其弟子小子^{茂實}之徒遐邇
 相約翕然來集莫不賀焉^{茂實}嘗隨二師

蘭說辨惑卷之下

右略地圖中一二ある所の
 正觀^カ、俗同^カ、通稱^カ、
 正觀^カ、詳あり、ことハ精圖^カに
 正觀^カ、
 五國ハ朱^カ、
 前説辨惑卷之下畢

附録

鸚齋杉田先生六十壽序

今茲壬子鸚齋先生年甫六十矣令嗣士
 業開壽筵先生嘗學蘭化先生首唱斯業
 于我邦蘭化先生亦齡七旬迎而偕壽
 之欲賀斯業之肇基兼佑其嘉觴於是乎
 金蘭之交暨其弟子小子^{茂實}之徒遐邇
 相約翕然來集莫不賀焉^{茂實}嘗踵二師

蘭化序成 附録

之門兼聲咳久矣不敢稱其壽乎乃奉觴
 而前曰茂質嘗事先生在其塾也先生語
 余曰我醫之道上古邈矣當戰國秦漢之
 際有素靈之書出命以聖人之作其所述
 五運六氣陰陽旺相生剋分配之說超高
 精微以飾以矜魏晉以降數百載之際苟
 志于醫者宗之源之推崇奉戴蛙譟雷同
 要之其說虛幻妄誕牽合傳會實用之道

殆墜于地施及我邦醫流奉承久矣日
 遷月錮慣習成風以為羣說雖有齟齬信
 之弗疑又從而為之辭無有出其範圍獨
 立而發矇者嗚乎不可歎乎當元祿室永
 之際洛有後藤良山者為人豪邁宏量卓
 識駁古來之醫說陰陽五行運氣勝復之
 論一洒之特基一家之說其嗣椿菴及弟
 子香修庵山東洋諸子傑然基峙能畢先

師之業於是乎以道瞭然而明其見解之高劑和之巧無愧于漢醫惜哉其所論說雖較可據未盡精微是無他皆取諸胸臆無有折衷得正者也方今國家昇平文運日躋德化之所蒸餘澤之攸及異邦殊域梯貢航獻之盛也和蘭之學崩然而興嘗聞其邦人精于諸術能葺杭于四方鍾衆邦之美以為其韞寃物理之奧致極實

際之至蹟星曆醫算為其最讀其邦之書籍原其所以主張其治療之術者醫人之業其要在知人身內外肢竅臟腑經絡關節之樞會欲苟志于醫者不本于斯則不能執刀圭而中其肯綮也醫家之精巧權輿于斯因得其內景之書求刑屍以剝解之參諸其所圖符合無差與漢人之所說大異乃悻然發憤矚然改視刻意於和蘭之

蘭說新志 附錄
學銳志厚繙譯之業蘭化先生嘗學于崎
港能其義余乃竭蹶赴之以師事之迺與
同臭之徒相校相閱終成內景新譯之書
因讀其治方之書皆無不履實究奧試諸
事之與物則左取右取必逢其原余業之
及于斯非唯宿志之適實藉天之寵靈遭
開業之秋豈不一大盛舉哉余等老矣此
道之大成非所及也能繼其志續其緒則

在吾子之徒其勉矣哉 茂質 誓首載拜曰
敬受命矣夫父有志則子續之師有志則
弟子成之余自受教念念在斯常常不忘
請雖不敏奉教繼志無敢失隊勉厲有年
得稍就緒業然資性罷駑未能金聲以玉
振之唯願與士業戮力竭心終身以集成
其業耳二師曰善哉言乎勉而無怠噫二
師之業大矣偉矣天地剖判以來未曾有

醫術之若是精者也外之奚適世之志于斯業者能觀其書而知保生之所育百骸之所關以其研究之方施之諸證則上自天子下至萬民凡有稟生之氣者免漫為螻蟻之食吁嗟其業之臻于斯也不唯二師之榮實天下蒼生之福也其壽者福祥不啻三唱南山天保焉宜直與此道永傳于無疆使天下之民免天昏地瘡之患躋

仁壽和煦之域兵遂志其事以為壽序寬政四年壬子十一月二日

蘭學會盟引

惟寬政甲寅十一月癸丑日南至越若來閏月甲子及群賢會于芝蘭堂尋西學翻譯之盟也何為用是日乃大西洋一千七百九十四年正月上日也何用其上日今讀其書肄其業於其穀旦者祝斯業之大成

也夫物之有偏長雖聖人有不及焉故仲
尼問禮於老聃學樂諸師襄豈直人也哉
管仲師馬陘明師蟻荀道之所存誰氏非
吾師夫吾醫之道炎黃以降聖賢間出草
討脩潤蓋無餘蘊矣雖然邈哉遠乎吾奚
以論其世也哉其載諸簡蓋在蒼姬之末
乎時則終始五德施亂我道古者稱萬物
今也五其數牽強傳會動見其間淄渾合

流薰藉同器論包宇宙失在眉睫豈可盡
信其書哉自此厥後非無僑傑多禁其方
後死莫述獨有長沙氏立言而不朽然唯
舉其綱未張其目尋及後世載籍極博唯
是繁而寡用語語而不詳非失函莽則弊
空嗜亦何是徵焉始吾思之忘寢忘食幸
遇先覺聞斯業其為術也近取諸身遠取
諸物施諸行事則親切著明其豈其空言

涵辭之所企及哉夫西方之人其性機巧
 上自天文曆數下至凡百技藝精工縝密
 幾奪天工唐都洛下箱口千古魯般工僅
 攬指九原日月所照孰出其右豈風土之
 使然抑何妙也則獨奚於我醫而疑之哉
 愚者所笑賢者察焉吾與諸君雖欲不師
 之將焉得不師嗚乎無怠無荒解其乎甲
 成其華實子々無已者其從今日始

右二篇之文得諸磐水漫草也蓋說斯學
 所由而起未有若是詳而盡者故附錄以
 公於同志云寬政戊午之冬越村深藏識

蘭説辨惑附録畢



蘭説辨惑終おふ志る也

昭代の運八蠻来聘し四夷化し帰して
 貢くとこ詔のたから百家終ふみ
 洒けくう我へ法ら書屋からんそり
 中め七阿蘭陀飛と終毛くまた家
 らきくのら書りゆらうひん六
 大洲を里ありいつるものにしを

名称主用未とくくあをらぬ法を
あはく邦人き難く古くを里其名
其用をあらわす契法をあるものゆゑ
此をふからま近之故阿蘭陀學に
こまを漢籍梵文蘭篆

皇國尔全備しをわ譯をるあ免れ者
のたところのふさるはあしに我

鷓齋杉田先生蘭藉翻譯の大業
を草創しあはしを里を免れ乃
みちいさるあはしを免れ
免れこの國といふ國の方位を法
を免れこの名稱主用尔はたを免れ
尔蘭藉にあらしをたあはしを免れ
はしを免れ

先生純篤子磐水大槻君いよく飛
 るく見安きうり尔志のまゝいそ十
 の業を成立しあらんと純出く返
 せしいとふあしゆ急尔このまを
 海をふともあら君乃門よむをを
 子いき家そりふり丹波國有馬文仲
 とふるもの世ふいひもそを物以数條

も君尔とび正しそ筆録しそ蘭
 説辨惑と題せおその稿深とく
 なるよいぬもそ身まふ孝ぬるさう
 以をらちをしそふこのゆ急に君
 の門生さるさしそ法化と上木の未
 とをまはるも阿さるをひ君よいしう
 ねも君かそ姓をぬるさうを事あし

あはれん瑣々たふ小言と二三子の一
 時徒問ふ多へる免世家のものも好ま
 山豆世平公みしと識者徒といふも
 秘くへんおのゝ世もも事こと那
 めれとのめいしと梨門生おるれと
 たきひしうあまとも君の人とあり
 一時の雑話といふとも寧ろよとあり

いじろ大寸たし記とてしへるあききれハ
 めめし徒はん大の書徒こと記小冊子
 といへとも西洋の群書おじろくた
 しとて多多くめしあへるが實録か
 孝和漢古今の書徒中お辨明しあ
 たきものおれハ世の人おきとも珍と
 しと傳寫しとておまをること十數

年美久羅昔日君をとゆふ

先生の門又あるをいしころ君り西洋の
ものうたをよかぬりよて彙録しそ
よとせぬおたきも乃安孝いよる名里
く蘭話詰問疑一助とふとんとたもふ
こと久しきるも一日この書をと君の門
人ふりり支仲り十の記におのり筆記

せむものよらふまはまふとと萬々
きれと法ましくぬ寫し法たへく魯魚
鳥焉の安也まるときくかかひいま文仲
りあはれましくし法は君校校正をと経く
上木のこと試君ふふとふまの前言の
たとくあるへく終ハやむとをよるひしを
いみしころ彙録せるとこ紙の筆記

とり奉りて終校讎しく友人肅夫りふを
子勞しく新又圖を製しとをいそりに
家刻をぬれ君の素志め探むくうかど
くふれとも謄寫たひうををましくいよ
くあ物まると後よはるへんぬまぬ
はるしもし佗日君の一覽を經ハおの
まじとを罪とけ人のとみはあら

ゆきしぬ時よ寛政の十とせとつと
の中冬望の日草あけ乃あ終津越
村義久羅幽蘭齋よ志ふん

古唐言集

陸奧仙臺侍醫西磐水大槻玄澤先生口授

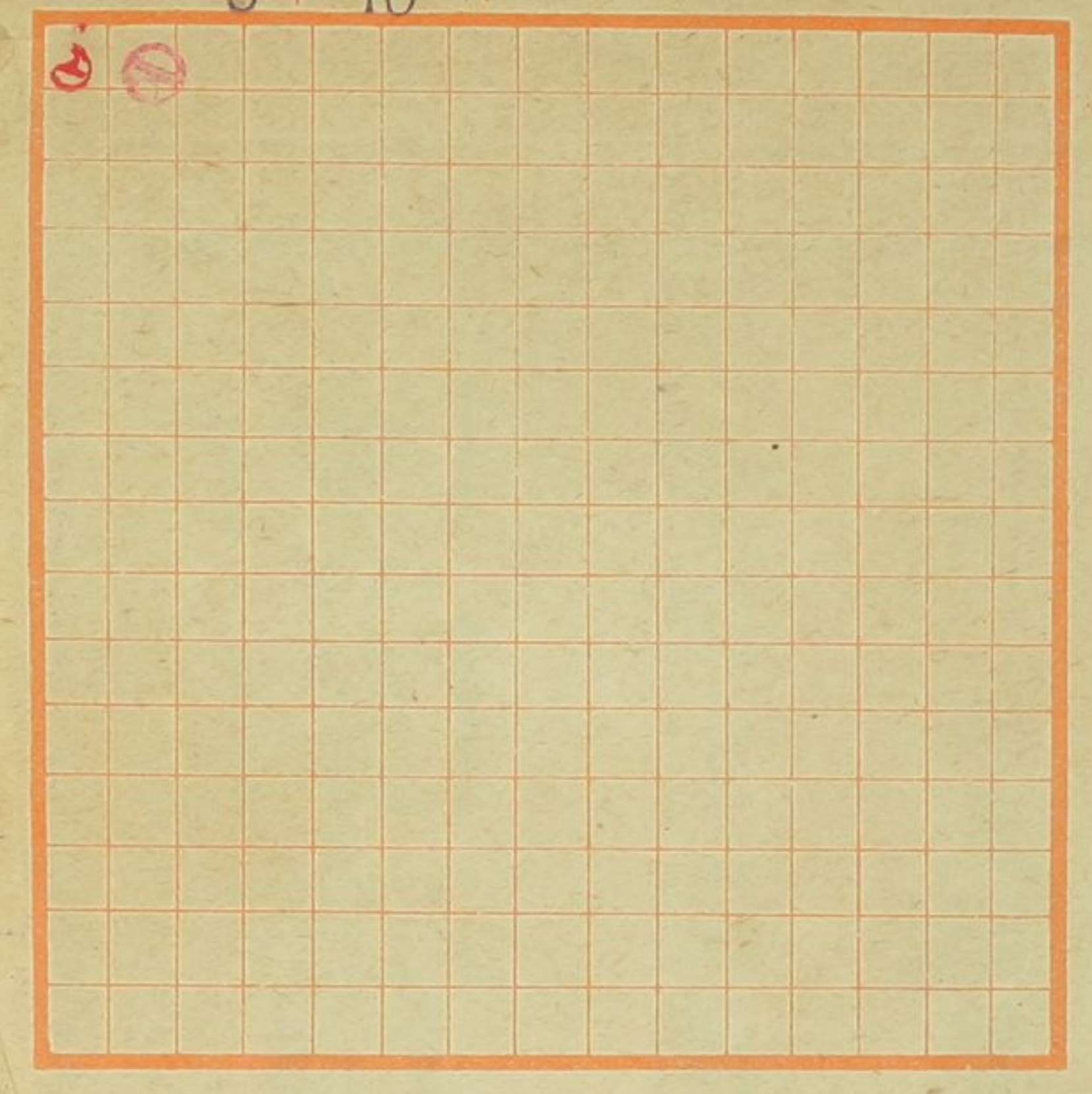
山醫官有馬文仲元晁筆記

越村深藏子虛父校正

藏板

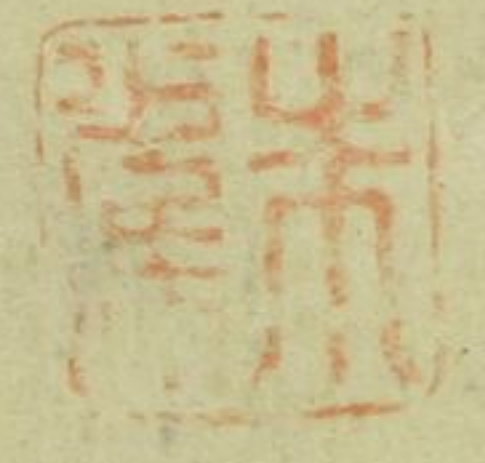


3年10月



郡工 洞津八町 正木傳右衛門

寛政十一年己未二月



製丸本所
勢易洞津東町
山形屋東助

文淵堂 併凡四千五百廿七

ハシロ



陸奧仙臺侍醫西磐水大槻玄澤先生口授

門人 丹波福智山醫官有馬文仲元晁筆記

伊勢洞津圖南越村深藏子虛父校正

幽蘭齋藏板



郡工 洞津八町 正木傳右衛門

寛政十一年己未二月

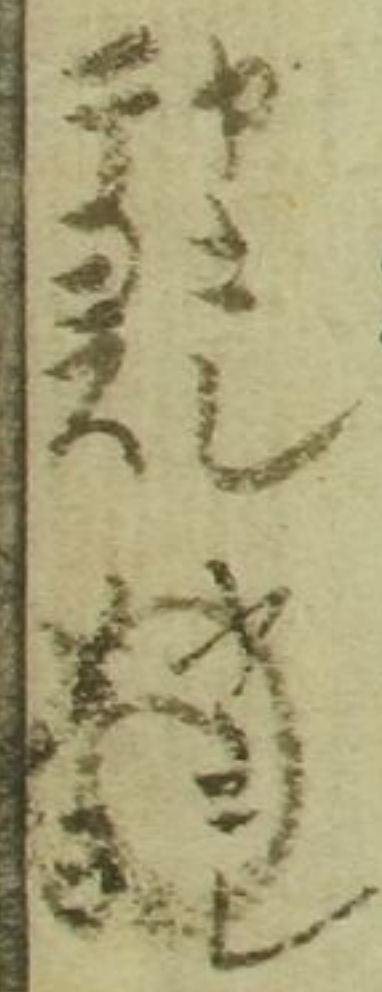


製丸年所

勢易洞津東町

山形屋東助

文淵堂 併九四千五百廿七



ハシロ

